

千葉県八千代市

# 高津新田野馬堀遺跡h地点

- 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

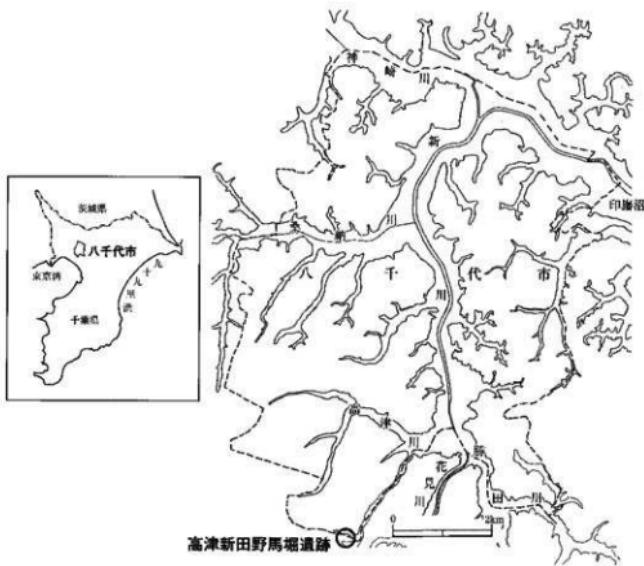
2007

大和ハウス工業株式会社  
八千代市遺跡調査会

ちばけんやちよし  
千葉県八千代市

たか つ しん でん の ま ぱり  
**高津新田野馬堀遺跡h地点**

－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－



## 序 文

八千代市は、「住宅団地発祥の地」として知られるように、昭和30年代初頭における八千代台のまちづくりを契機として住宅団地の造成が進み、首都30km圏に位置する住宅都市として成長を続けてきました。

昭和60年代以降、市域北部における大学と住宅地のセット開発が行われ、文教都市としての側面も併せ持つようになっています。また、京成電鉄に加えて平成8年4月には東葉高速鉄道が開業したこと、都心へのアクセスもさらに便利となり、沿線を中心とした新しいまちづくりが進み、県内の中堅都市として発展しております。

このような状況のもと、八千代市遺跡調査会では、市内で行われる個人や民間企業の開発行為、土地区画整理事業などに先行する埋蔵文化財発掘調査に従事してまいりました。

本報告書に掲載した調査は、市域の南西部に当たる八千代台南地区において実施された宅地造成事業に先行するもので、この事業地については、平成11年度に埋蔵文化財についての照会があり、同年度に八千代市教育委員会が確認調査を、翌12年度に八千代市遺跡調査会が本調査を実施したものです。

「高津新出野馬塚遺跡」は、野馬土手とともに江戸時代の野馬の牧の存在を示す遺跡です。江戸幕府の直轄領であった房総三牧の一つである小金牧に属する下野牧の南東端に位置します。当地域を代表する近世遺跡の一つですが、開発の進行に伴い野馬土手・野馬塚ともに次第に姿を消してしまいました。今回の調査報告は、この貴重な近世遺跡の記録となりました。

過去の人々の生活に思いを馳せ、地域を慈しむ心を育てる教材として、本報告書が大いに活用されることを願っております。

最後になりましたが、調査の実施にあたり多くなご協力とご指導をいただいた事業者・地権者を始めとする皆様に、厚く御礼申し上げます。また、調査や整理に従事された調査員・補助員の皆様に対して深く感謝いたします。

平成19年6月20日

八千代市遺跡調査会

会長 加賀谷 孝

## 凡　例

1. 本書は、千葉県八千代市八千代台南2丁目1-2・4-1に所在する高津新田野馬堀遺跡b地点の、平成12年度に実施された発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、宅地造成事業に先行するもので、大和ハウス工業株式会社と八千代市遺跡調査会の間で締結した委託契約に基づき、八千代市遺跡調査会が実施したものである。
3. 調査及び整理は以下のように実施した。

本調査：期間 平成12年4月17日～5月8日 対象面積750m<sup>2</sup>

本整理：期間 平成19年3月1日～平成19年6月20日

4. なお、本調査に先行する確認調査は、高津新田野馬堀遺跡以外の範囲に及ぶものであったので、高津新田遺跡b地点として八千代市教育委員会が実施した。

高津新田遺跡b地点 確認調査：期間 平成12年3月14日～3月30日 面積690m<sup>2</sup>/4,336m<sup>2</sup>

この調査の結果については、平成12年度に八千代市教育委員会から報告されているが、その報告に記載できなかった内容について、適宜本書に掲載させていただいた。

5. 本調査・本整理とも、常松成人が担当した。
6. 本書の図版作成は、常松・野中則子が行い、遺物の写真撮影は高屋麻里子・常松が行い、編集・執筆は常松が担当した。
7. 土器・陶磁器類については、鳴田浩司にご助言を賜った。石器については、千葉寛氏・柴田徹氏にご協力とご助言を賜った。
8. 遺構Noは、原則として調査時の呼称をそのまま用いている。なお4号溝（4M）は、欠番となっている。
9. 土層説明の土色の表記法については、一部、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』（13版1993.1）を用いた。
10. 遺物は、原則として一括（取り上げ番号無し）で取り上げている。観察表の「計測値」における（数値）は、復元値を、<数値>は、欠損部がある場合の残存部の計測値である。
11. 遺物胎土の砂粒及び遺物礫の大きさについては、粒径0.02～0.2mmを細砂、0.2～2mmを粗砂、2～10mmを細礫、10～50mmを小礫、50～100mmを中礫とした。
12. 出上した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
13. 発掘調査から整理作業の間ににおいて、以下の諸氏・諸機関にご指導・ご協力をいただきました。記して感謝いたします。

柴田 徹 千葉 寛 中野修秀 鳴田浩司 武藤健一 村田一男 和田幸世  
和田 玉

千葉県教育庁文化財課 八千代市教育委員会 八千代市郷土歴史研究会

## 目 次

序文

凡例

目次

### I 序章

1 調査に至る経緯	(1) 照会と回答 1	(2) 確認調査 1	(3) 本調査 1
2 遺跡の概要	(1) 遺跡の立地 1	(2) 高津新田野馬堀遺跡におけるこれまでの調査 3	
3 調査の概要	(1) 高津新田遺跡 b 地点について 3	(2) 本調査の経過 5	
	(3) 本整理 5		

### II 造構と遺物

1 各トレンチの概要	(1) 確認調査Aトレンチ 6	(2) 本調査Aトレンチ 6	
	(3) 本調査Bトレンチ 12	(4) 本調査Cトレンチ 12	
	(5) 本調査Dトレンチ 12		
2 各造構	(1) 野馬土手 13	(2) 1号溝 13	(3) 2号溝 19
	(4) 3号溝 19	(5) 5号溝 19	(6) 6号溝 19
3 遺物	(1) 1号溝出土遺物 20	(2) 2号溝出土遺物 21	
	(3) 3号溝出土遺物 22	(4) 5号溝出土遺物 22	
	(5) Dトレンチ出土遺物 23	(6) その他のトレンチ出土遺物 24	
	(7) 採集遺物 24		

### III 成果と課題

1 野馬土手	28
2 野馬堀	28
3 高津新田野馬堀遺跡の位置	30
4 高津新田遺跡	30
5 おわりに	30
参考文献	31
報告書抄録	32
写真図版	

# I 序章

## 1 調査に至る経緯

### (1) 照会と回答

平成12年2月、大和ハウス工業株式会社船橋支店（以下「事業者」と略）から、宅地造成のため、八千代市八千代台南2丁目1-2・4-1について、埋蔵文化財の有無の照会が八千代市教育委員会（以下「市教委」と略）に提出された。これを受け市教委は、現地踏査を実施した。照会地は、高津新田遺跡（No250）・高津新田野馬堀遺跡（No251）の範囲内であり、現状において、野馬除土手と考えられる土手状造構（以下「野馬土手」とする。）を確認することもできた。現況は、畑地及び荒蕪地で、北側へ緩やかに下る斜面地であった。遺物は、泥面子や陶磁器片を多量確認した。縄文土器は、小片をごく少量確認したのみであったが、隣接地において平成4年度に縄文早期燃糸文期の住居跡1軒を検出している（高津新田遺跡a地点）ため、本照会地においても同様の造構が存在する可能性があると考えられた。このため市教委は、照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨事業者に回答した。

### (2) 確認調査

確認調査は、高津新田遺跡b地点の調査として、市教委が国庫補助・県費補助を受けて平成12年3月に実施した（第4図）。

調査の結果、野馬土手と組になる野馬除掘と考えられる溝（以下「野馬堀」とする。）2条を確認したが、高津新田遺跡としては、造構が検出されなかった（市教委2000）。遺物は、泥面子、陶器、磁器、素焼土器、瓦、礫などを得た。また埋没谷の存在を確認した。

### (3) 本調査

確認調査の結果を受け、野馬土手・野馬堀部分750m<sup>2</sup>を本調査の対象とした。千葉県教育委員会（以下「県教委」と略）の指導のもと、事業者と市教委が協議した結果、現状保存は不可能であり、記録保存のため本調査を実施することとなった。調査費用は、事業者が負担することで合意した。

事業者から、文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定による土木工事の発掘届が、八千代市遺跡調査会（以下「調査会」と略）から、同法第57条第1項（当時）の規定による埋蔵文化財調査の発掘届が、年度当初のため、ともに平成12年4月3日付で提出された。同年4月7日、事業者・市教委・調査会の三者間で埋蔵文化財に関する協定を締結して遺跡の取扱いについて定め、さらに同日付で、事業者と調査会間で発掘調査についての委託契約を締結し、調査に着手することとなった。調査会は、準備が整った同年4月17日に調査を開始した。

## 2 遺跡の概要

### (1) 遺跡の立地

高津新田野馬堀遺跡は、市域の南西部、千葉市との市境付近に所在する。市域の南部を流れる高津川の低地から南西方向に伸びる足太川谷津の上流に、谷津から西に入る支谷がある。この支谷を北に臨む台地上に残っていた野馬土手と野馬堀の痕跡を高津新田野馬堀遺跡と命名した。b地点は、その遺跡範囲の東端に位置し、標高21~22m付近である。千葉県北西部に広がる広大な牧の一部に相当する。この牧とは、江戸幕府の直轄領となっていた房総三牧の一つである小金牧に属する下野牧である。高津新田野馬堀遺跡の野馬土手と野馬堀は、下野牧の南東端に当たり、八千代市側は牧の外側、千葉市側が牧の内側である。



第1図 高津新田野馬堀遺跡(TN)・高津新田遺跡(T)各調査地点



第2図 明治時代の高津新田付近 ○がh地点(牧野・板谷2002年に加筆)



第3図 下野牧全体図

## (2) 高津新田野馬堀遺跡におけるこれまでの調査

八千代市域は、下野牧に接する地域であり、牧の維持管理に伴う諸役を負担する野付村々が存在するということで、下野牧は市域の歴史を語る時に欠かせない要素であった。しかしその牧の遺構である野馬土手・野馬堀が市内に存在することについては、よく認識されていなかったらしく、千葉県による中近世遺跡分布調査（千葉県教委1970）や、生産遺跡詳細分布調査（藤下1986）などでは取り上げられていない。高津新田野馬堀遺跡は、昭和57（1982）年度に市教委が県費補助を受けて実施した埋蔵文化財包蔵地所在調査において、遺跡No251として初めて登録された（市教委1983）。この時は、土手の存在が明瞭だった長さ約300mほどの範囲が認識されたが、その後土手の無い所にも野馬堀が埋もれて存在することが確認され、平成9年度の埋蔵文化財分布地図の改訂版では、少なくとも約1kmに及ぶ遺跡と認識が改められた。同時に、高津新田遺跡（No250）に統合されている（財団法人千葉県文化財センター1997）。しかし両遺跡は範囲が極端に異なるので、市教委としては、統合して扱うのは無理と判断し、別遺跡として扱っている。

住宅街に存在する本遺跡では開発行為が多く、調査事例も多い（第1図）。a地点は、京成線の東に隣接する区域で、昭和58（1983）年に調査されたが、野馬土手・野馬堀に関する知見は得ていない。b地点は、遺跡範囲のほぼ中央部で、昭和60（1985）年に調査され野馬堀2条を確認した（近江屋1999）。c地点は、b地点の西側であるが調査を行わなかった。d地点は、京成線の西側で、平成2（1990）年に調査し、野馬堀3条を確認した（市教委1991）。e地点は、野馬土手が比較的良好に残っていた区域で、平成4（1992）年に調査した（市教委1993）。f地点は、h地点の西側で、野馬土手と野馬堀を確認した。またこの調査では、縄文時代早期撚糸文期の住居跡1軒を発見した。これは、現在のところ市内最古の堅穴住居跡ということになる。この住居跡の所在地は、高津新田遺跡a地点である（注：この調査の際に地元の方から、ここが「おおうけ（大請）」という地名だと伺ったため、「大請遺跡」とも呼称したことがある）。g地点は、平成10（1998）年に調査し、野馬堀1条を確認した（市教委2002b）。i地点は、遺跡の西端で、d地点に接する。d地点とほぼ同様の成果が得られた（市教委2002a）。この調査は、開発事業が八千代市と千葉市にまたがるため、千葉市教育委員会と協力して行われた（財団法人千葉市文化財調査協会2001）。

これらの調査から得られた野馬堀・野馬土手に関する知見は、h地点の成果と併せてⅢ章で触れたい。

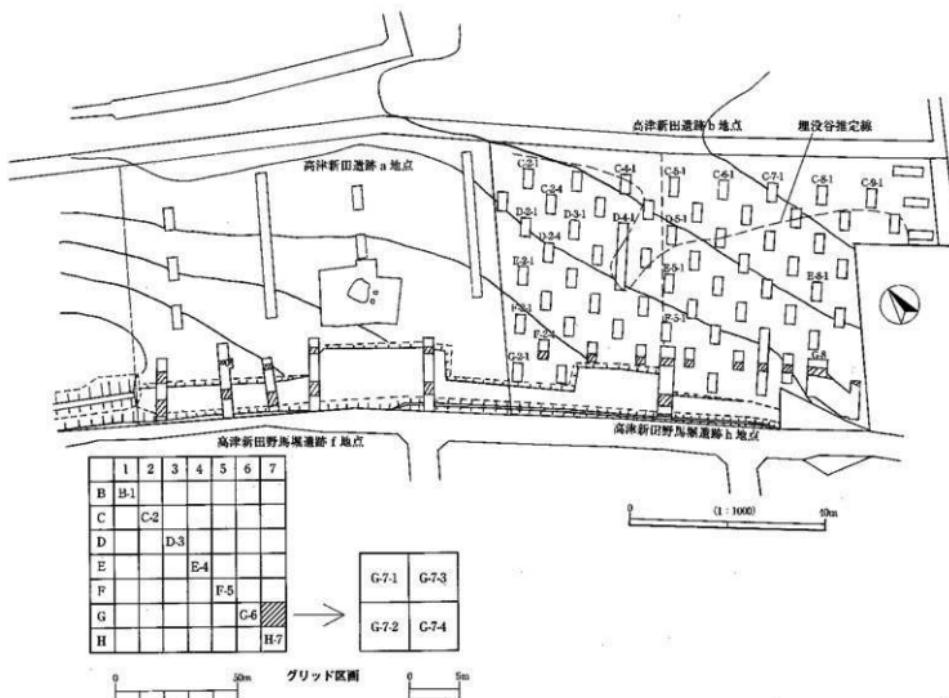
## 3 調査の概要

### (1) 高津新田遺跡b地点について

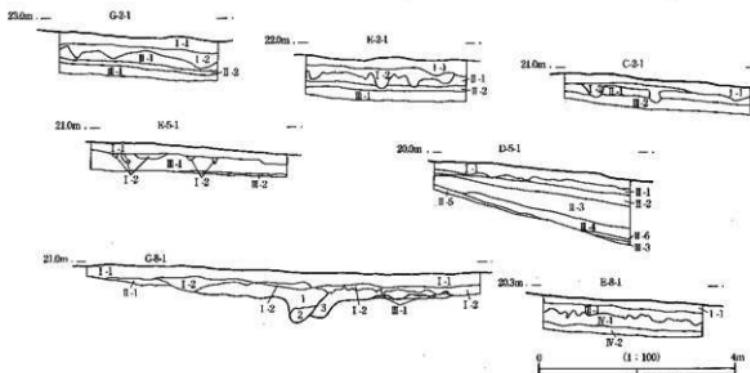
今回の本調査に先行して行われた高津新田遺跡b地点確認調査の結果については、市教委から報告されている（市教委2000）が、ページ数の制約などのため割愛された内容があるので、ここで触れておきたい（第4図）。なお、確認調査の結果については、Ⅱ章以降でも適宜言及した。確認調査は、調査地点の形状に合わせて10m四方に区画し、アルファベットと数字の組合せで表現し、さらにその中を5m四方の小グリッド4つに区画した。

原則として2m×4mのトレンチを掘削し、適宜拡張しつつ遺構検出に努めた。

I層については第5図に示した。土層の観察は、すべてトレンチの北西壁で行った。I-1層：7.5YR2/3（極暗褐色土）の耕作上で、極疎。I-2層：7.5YR2/3（極暗褐色土）の旧耕作土で、疎。II-1層：7.5YR3/4（暗褐色土），密。II-2層：7.5YR2/2（黒褐色土），密。II-3層：7.5YR2/1（黒色土），密。II-4層：7.5YR1.7/1（黑色土），密。粘性あり。II-5層：7.5YR4/4（褐色土），密。II-6層：7.5YR3/1（黒褐色粘土）。III-1層：7.5YR4/6（褐色土），ソフトローム。III-2層：7.5YR3/3（暗褐色



第4図 高津新田遺跡b地点確認調査トレンチ配置図



第5図 高津新田遺跡b地点トレンチ土層

土），粘性強。ソフトロームが水分のため変質したものか。Ⅲ-3層：7.5YR5/4（にぶい褐色粘土）。Ⅳ-1層：7.5YR4/6（褐色土），ハードローム。Ⅳ-2層：7.5YR3/3（暗褐色粘土）。ハードロームが水分のため変質したものか。1号溝（1M）覆土：1：7.5YR4/4（褐色土）。2：7.5YR4/4（褐色土），しまりなし。50mm以下のロームブロックを含む。3：7.5YR4/4（褐色土），しまりなし。ロームブロック（2より小さい）含む。

調査地点の北側が足太川谷津から西に入る支谷であるため、調査地点は、北～北東に向かって緩やかに低くなる斜面の畠地であった。この地表面の観察では気付かなかった旧地形が、確認調査の結果明らかになった。暗褐色土の平面分布やD-5-1G トレンチの土層から、図示したとおり北からE-4G付近に向かって小谷が入っていると判断された。このような埋没谷は、b 地点の北隣の高津新田遺跡c 地点や、西方の高津新田馬堀 i 地点でも確認された。これらの谷は明治時代の地形図にも表れておらず、江戸時代以前に埋没したものと見られる。現在、支谷・足太川谷津ともに暗渠となっており、谷地形はさらに見えにくくなっているが、かつては深い谷が刻まれていたのかもしれない。

b 地点の畠地の地表面には、大量の泥面子が散布していた。この周辺は、市内有数の泥面子散布地帯と考えられる。Ⅱ章にその一部を図示した。

### （2）本調査の経過

野馬堀・野馬土手の調査は、トレンチ調査を基本としている。

野馬土手については、現況測量を優先した。すでに改変が著しいと判断されたので、土層調査は行わなかつたが、この点には反省の余地がある。野馬堀の確認を主目的として、西から順にA トレンチ、確認調査A トレンチを挟み、B トレンチ、2号溝が屈曲するかどうか確認するためのC トレンチ、1号溝が屈曲する状態を確認するD トレンチをそれぞれ設定し、掘削調査を行った。

平成12（2000）年4月17日調査開始。機材搬入。上手の草刈と現況写真撮影、測量開始。18日土手測量終了。トレンチ設定。19日重機でトレンチ掘削。杭打ち。A トレンチ調査開始。24日B トレンチ、D トレンチ調査開始。26日C トレンチ調査開始。5月1日A トレンチ調査終了。2日B トレンチ、D トレンチ調査終了。8日D トレンチ調査終了。重機による埋め戻し。機材撤収し現地調査を終了した。

### （3）本整理

発掘報告書刊行に向けた本整理は、当初平成13年度中に行う予定であったが、調査会側の事情により延期し、平成18～19年度に着手した。

## II 遺構と遺物

### 1 各トレンチの概要（第6図）

トレンチごとに検出遺構について概要を報告する。

#### （1）確認調査Aトレンチ（第7図）

高津新田遺跡h地点確認調査のトレンチである。本調査範囲のはば中央に位置する。トレンチの大きさは、 $14.6m \times 3.5m$ 。北から順に1号溝、2号溝、3号溝を検出した。なお、（2）以降では、「確認調査トレンチ」あるいは「確認トレンチ」と省略して記述する。

1号溝は、並行する2条の溝がほぼ接した状態である。その北に3条、南に1条の本トレンチ内で終息する溝が接しており、これらは1号溝よりも新しい溝と考えられる。本トレンチを縦に貫くように畑の境があるため、このように終息する溝が多いのかもしれない。

2号溝は、短軸断面が逆台形になるしっかりとした掘り込みの溝である。北側の立ち上がりにテラス部があるが、これは2号溝も2条の溝から成っており、古い方の溝が浅く、新しい溝が少し南にずれて掘られたためこのような形状になったものである。

3号溝は、小規模な溝である。このトレンチでは擾乱を多く受けている。

1号溝と2号溝の間に外堀の野馬土手が存在していたはずであるが、削平されてしまっている。2号溝の上の地表面周辺が畠地より $60\sim70cm$ 高い荒蕪地となっており、これが土手の名残かもしれないが、発掘調査では特に所見を得ることができなかった。

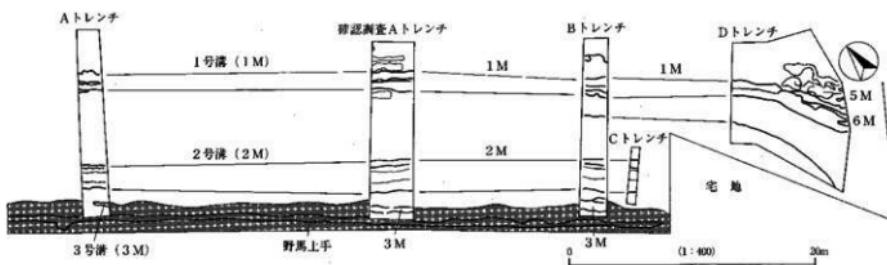
#### （2）本調査Aトレンチ（第8図）

調査区の北西端近くに設定した。トレンチの大きさは、 $15m \times 2m$ 。確認調査トレンチと同様に、北から順に1号溝、2号溝、3号溝を検出した。

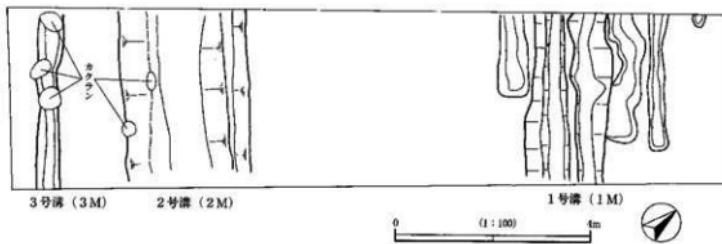
1号溝は、並行する2条の溝が交わり、南の溝が北の溝を切っていることがわかる。

2号溝は、やはり北側の立ち上がりにテラス部、すなわち古い溝の底面がある。

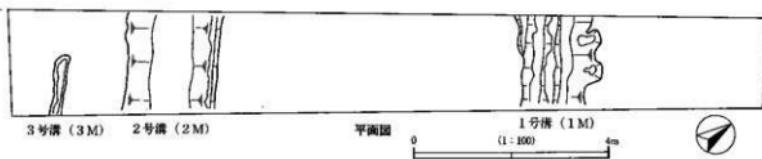
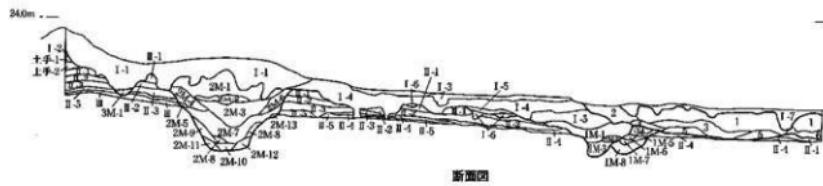
ここで土手の一部を掘り、土層の一部を観察した。



第6図 高津新田野馬堀遺跡h地点全体図



第7図 確認調査Aトレンチ平面図



第8図 Aトレンチ実測図

第1表 Aトレント西壁土層

No	色	腐食	構造	かたさ	難密度	可塑性	植物根	その他
I-1	7.5YR2.5/2 黒褐色	頗る富む	層粒状	0	3~9	0	頗る富む、主根 あり	脆い。
I-2	7.5YR3/1 黒褐色	頗る富む	層粒状	0	10	弱	上根・細根富む	根のため表面観察困難。
I-3	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	層粒状	0	0~5	弱	細根あり	
I-4	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	層粒状～亞 角塊状	小	10~13	弱	細根あり、主根 あり	径1~2mm黄色粒子、徑3~5mm 黒褐色粒子、燒土粒子、炭化材 片。
I-5	7.5YR3/2, 3/3 黒褐色、暗褐色	富む～頗る 富む	亜角塊状	小	6~12	弱～中	細根あり	暗褐色土ブロック状。徑3mm以 下黄色粒子、炭化材片少量。
I-6	7.5YR3/1, 3/2 褐色、3/3暗褐色	富む～頗る 富む	亜角塊状	小	12~15	中	細根あり	耕作土。燒土粒子、炭化材片。
I-7	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	層粒状～亞 角塊状	小	3~8	弱	細根あり	耕作土。徑1mm黄色粒子・燒土 粒子まばら。
II-1	7.5YR3/2-3/3 黒褐色～暗褐色	富む～頗る 富む	亜角塊状	中	8~18	中～強	細根含む	
II-2	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	層粒状～亞 角塊状	小	17	中～強	細根含む	
II-3	7.5YR3/1 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	中	20	中～強	細根含む	
II-4	7.5YR3/2, 4/3 黒褐色、褐色	富む～頗る 富む	亜角塊状	中	20	強	細根あり	
II-5	7.5YR3/1, 4/4 黒褐色、褐色	富む～頗る 富む	亜角塊状	中	18~20	強	細根あり	II-3とロームが混じり合う。
III	7.5YR4/4褐色	含む	亜角塊状	中	18~20	強	細根あり	ソフトローム
1	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	層粒状～亞 角塊状	小	4~6	弱	細根あり	耕作土。徑1mm黄色粒子・燒 土粒子ごく少量。徑1cmローム ブロック・褐色土ブロックまば ら。
2	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	層粒状～亞 角塊状	小	4~6	弱	細根あり	耕作土。徑3mm以下黄色粒子ご く少量。
3	7.5YR3/2土体、 3/1黒褐色	頗る富む	層粒状～亞 角塊状	小	5~9	弱	細根あり	耕作土。徑1cm以下暗褐色土ブ ロック。
4	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	層粒状～亞 角塊状	小	8~10	弱	細根あり	耕作土。徑1cm以下暗褐色土ブ ロック少量。
5	7.5YR2.5/2 黒褐色	頗る富む	層粒状～亞 角塊状	小	6~9	弱	細根あり	耕作土。徑1cm以下暗褐色土ブ ロックごく少量。徑0.5mm黄色 粒子ごく少量。
6	7.5YR3/1, 3/2 黒褐色	頗る富む	層粒状～亞 角塊状	小	13	弱～中	細根あり	耕作土。燒土粒子ごく少量。

第2表 1号溝（Aトレント）土層

No	色	腐食	構造	かたさ	難密度	可塑性	植物根	その他
IM-1	7.5YR3/1 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	10	中	細根あり	1AM覆土。徑5cm暗褐色土ブ ロック少量。
IM-2	7.5YR3/3 暗褐色	富む	亜角塊状	小	20	中	なし	1AM覆土。徑1mm以下黄色粒子 多量。
IM-3	7.5YR3/3 暗褐色	富む	層粒状～亞 角塊状	小	5~12	中	細根あり	1AM覆土。徑3cm以下ロームブ ロック・粒子多量。
IM-4	7.5YR3/3 暗褐色	富む	亜角塊状	小	10~15	中	細根あり	1BM覆土。徑5cmロームブロック。 徑1cm以下ロームブロックま ばら。黒褐色上少量。
IM-5	7.5YR3/1 黒褐色、 3/3 暗褐色	富む～頗る 富む	層粒状～亞 角塊状	小	7~9	弱	細根あり	1BM覆土。徑1cmロームブロッ ク少量。
IM-6	7.5YR3/3 暗褐色、 4/4 褐色	富む～含む	亜角塊状	小	15~17	中	細根あり	1BM覆土。ローム。
IM-7	7.5YR3/3 暗褐色	富む	亜角塊状	小	15	弱～中	細根あり	1BM覆土。ロームごく少量。
IM-8	7.5YR3/3 暗褐色	富む	亜角塊状	小	12	中	細根あり	1BM覆土。徑1~5cmロームブ ロック多量。

第3表 2号溝 (Aトレンチ) 土層

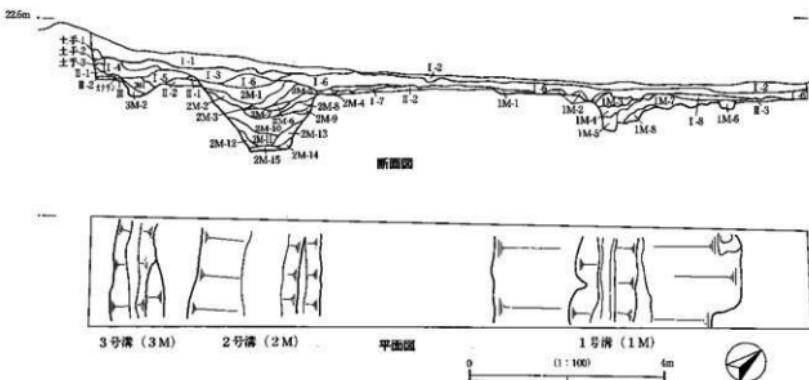
No	色	腐食	構造	かたさ	緑密度	可塑性	植物根	その他
2M-1	7.5YR2.5/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	中	11~17	中	細根富む、主根あり	径3mm以下黄色粒子、径5mm以下黒褐色粒子。
2M-2	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	15	弱	細根あり、主根あり	径3mm以下黄色粒子少量、径5mm以下黒褐色粒子少量。
2M-3	7.5YR3/2 黒褐色、 3/3 黒褐色斑状	頗る富む~ 富む	亜角塊状	小	15~17	中	細根あり、主根あり	黄色粒子・黒褐色粒子。
2M-4	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	14~15	中	細根あり	黄色粒子・黒褐色粒子少量。
2M-5	7.5YR4/4褐色土 体、3/2黒褐色	含む~頗る 富む	同粒状	0	10	強	細根あり	ローム主体。
2M-6	7.5YR3/1 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	13~15	中	細根あり、主根あり	
2M-7	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	18~22	中~強	細根あり	黄色粒子・黒褐色粒子。しまりあり。
2M-8	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	中	16	強	細根あり	黄色粒子多量。
2M-9	7.5YR4/2黒褐色、 4/4褐色	頗る富む~ 含む	亜角塊状	中	13~15	強	細根あり、主根あり	黒褐色土とローム。
2M-10	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	中	19~22	強	細根あり	径5mm黄色粒子多量、黒褐色粒子。
2M-11	7.5YR3/1・3/2黒 褐色、4/4褐色	頗る富む~ 含む	亜角塊状	小	14	強	細根あり	黒褐色土とローム混じり合う。
2M-12	7.5YR3/2 黒褐色、 4/4褐色	富む~含む	亜角塊状	小~中	19	強	細根あり	黒褐色土とローム混じり合う。 ロームは11より少ない。
2M-13	7.5YR3/2 黒褐色、 4/4褐色	富む~含む	亜角塊状	中	19	中	細根あり	黒褐色土とローム。

第4表 3号溝 (Aトレンチ) 土層

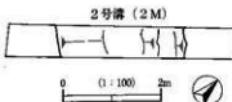
No	色	腐食	構造	かたさ	緑密度	可塑性	植物根	その他
3M-1	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	10~12	強	細根あり	

第5表 野馬土手 (Aトレンチ) 土層

No	色	腐食	構造	かたさ	緑密度	可塑性	植物根	その他
1	7.5YR2/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	中	10~16	弱~中	主根・細根富む	径0.5mm以下黄色粒子・赤色粒子少量。
2	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	中	18~20	中	細根富む	径0.5mm以下黄色粒子・赤色粒子多量。



第9図 Bトレンチ実測図



第10図 Cトレント平而図

第6表 B トレンチ西整土層							その他
No	色	腐食	構造	かたさ	緻密度	可塑性	植物根
I-1	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	顆粒状	0	0~5	中	細根富む 脆い。ビニール片などの現代ゴミを含む。
I-2	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	顆粒状	0	8~16	弱	細根富む 脆い。耕作土。
I-3	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	顆粒状～亜角塊状	小	7~10	中	細根あり
I-4	7.5YR3/2, 4/3 黒褐色, 褐色	富む～頗る富む	顆粒状～亜角塊状	小	8~10	中	細根富む
I-5	7.5YR3/3, 4/3 褐褐色, 褐色	富む	亜角塊状	小	8~14	中	細根あり 径5mm以下黄色粒子を含む。
I-6	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	中	13~17	中	細根あり 径2mm黄色粒子・径5mm以下黒褐色粒子をまばらに含む。
I-7	7.5YR3/2, 4/4 黒褐色, 褐色	富む～頗る富む	亜角塊状	小～中	16~17	中	細根あり ロームが混じる。
I-8	7.5YR3/2 墨褐色	頗る富む	亜角塊状	小～中	16~18	弱～中	細根あり 径3mm以下黄色粒子・焼土・炭化材を含む。
II-1	7.5YR4/3 褐色	富む	亜角塊状	中	13~16	中	解根含む
II-2	7.5YR4/3.5 褐色	富む	亜角塊状	中	17	中～強	なし
II-3	7.5YR3/3 褐褐色	富む	亜角塊状	小	13~17	弱～中	細根あり
III	7.5YR4/4褐色	含む	亜角塊状	中	12	強	なし ソフトローム

### 第7表 野馬土手（Bトレンチ）土層

No	色	腐食	構造	かたさ	緻密度	可塑性	植物根	その他
1	75YR3/1 黒褐色	頗る富む	網紋状～亞 角状	小	3～6	弱～中	細根富む	
2	75YR3/2 黒褐色	頗る富む	網紋状	0	3～5	中	細根富む	
3	75YR3/3 暗褐色	富む	網紋状～亞 角状	小	3～7	中	細根富む	

第8表 1号溝（Bトレンド）土層

No	色	腐食	構造	かたさ	織密度	可塑性	植物根	その他
1M-1	7.5YR4/3半赤3/3 黒褐色、暗褐色	富む	亜角塊状	中	15~18	中	細根あり	1AM覆土。
1M-2	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	中	13~17	中	細根あり	1AM覆土。ロームブロックを多く含む。
1M-3	7.5YR3/3、4/3 暗褐色、褐色	富む	角粒状～亜角塊状	小	13	中	細根あり	1AM覆土。
1M-4	7.5YR3/1 黒褐色	頗る富む	角粒状～亜角塊状	小	7~12	中	細根あり	1AM覆土。
1M-5	7.5YR3/3 暗褐色	富む	角粒状	0	7~10	中~強	細根あり	1AM覆土。径6cmロームブロックを含む。範い。
1M-6	7.5YR3/2、3/3 黒褐色、暗褐色	頗る富む～ 富む	亜角塊状	小	11~13	弱～中	細根あり	1BM覆土。径2cmロームブロックを含む。
1M-7	7.5YR3/3 暗褐色	富む	亜角塊状	小	14~16	中	細根あり	1BM覆土。径1cmロームブロックを含む。
1M-8	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小～中	15~16	中	細根あり	1BM覆土。径3cmロームブロック、焼土粒子を含む。

第9表 2号溝（Bトレンド）土層

No	色	腐食	構造	かたさ	織密度	可塑性	植物根	その他
2M-1	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	5~12	中	細根あり	径10mm以下黄色粒子・黒褐色粒子を含む。
2M-2	7.5YR3/2・3/3 黒褐色・暗褐色	頗る富む～ 富む	亜角塊状	小	13~18	中	細根あり	径10mm以下黄色粒子・黒褐色粒子を含む。上より多い。
2M-3	7.5YR3/2黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	13~14	弱～中	細根あり	径40mm以下ロームブロックを含む。黒褐色粒子を含む。
2M-4	7.5YR3/2、4/4 黒褐色、褐色	頗る富む～ 富む	亜角塊状	小	12	中	細根あり	ローム混じる。焼土含むが搅乱か。
2M-5	7.5YR3/1.5 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	14~15	弱～中	細根あり	径5mm以下黄色粒子・黒褐色粒子をまばらに含む。
2M-6	7.5YR4/3、2.5/2 褐色、黒褐色	富む～頗る富む	亜角塊状	小	13~15	中	細根あり	黒褐色粒子を含む。
2M-7	7.5YR2/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	12~16	中	細根あり	径2mm以下黄色粒子・径5mm以下黒褐色粒子を少量含む。
2M-8	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	16	中	細根あり	径2mm以下黄色粒子・径5mm以下黒褐色粒子を少疊含む。
2M-9	7.5YR3/3 暗褐色	富む	亜角塊状	小	14	中	細根あり	径2mm以下黄色粒子を多く含む。
2M-10	7.5YR3/2.5 黒褐色・暗褐色	頗る富む～ 富む	亜角塊状	中	17~22	中	細根あり	径5mm以下黄色粒子・黒褐色粒子を多量含む。
2M-11	7.5YR4/3.4/4褐色	富む～含む	亜角塊状	中	16~23	中～強	細根あり	崩壊したローム。径5mm黒褐色粒子をまばらに含む。
2M-12	7.5YR4/3.4/4褐色	富む～含む	亜角塊状	小	8~14	強	細根あり	崩落したローム。11より範い。
2M-13	7.5YR3/3、4/3 暗褐色、褐色	富む	亜角塊状	小～中	15~19	強	細根あり	ローム多量混じる。径3mm以下黄色粒子を多量含む。
2M-14	7.5YR3/3 暗褐色	富む	亜角塊状	中	17	強	細根あり	径3mm以下黄色粒子を少疊含む。
2M-15	7.5YR4/4褐色	含む	亜角塊状	中	20~25	強	細根あり	ローム主体。

第10表 3号溝（Bトレンド）土層

No	色	腐食	構造	かたさ	織密度	可塑性	植物根	その他
3M-1	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小	10	中～強	細根あり	径1mm以下黄色粒子を少量含む。
3M-2	7.5YR3/3、4/4 暗褐色、褐色	富む～含む	亜角塊状	小	10~12	中	細根あり	ローム混じる。

### (3) 本調査Bトレンチ (第9図)

調査区の南東に設定した。トレンチの大きさは、 $14.5m \times 2m$ 。Aトレンチと同様に、北から順に1号溝、2号溝、3号溝を検出した。

1号溝は、Aトレンチと同様に、並行する2条の溝が交わり、南の溝が北の溝を切っていることがわかる。

2号溝は、やはり北側の立ち上がりにテラス部、すなわち古い溝の底面があるが、安定的なものではない。

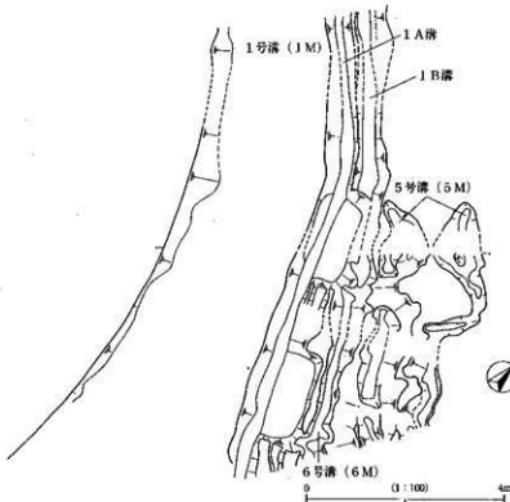
3号溝の規模がやや大きくなっている。

### (4) 本調査Cトレンチ (第10図)

Bトレンチの $1.6 \sim 2m$ 南東に設定した。トレンチの大きさは、 $4.5m \times 0.65m$ 。2号溝が1号溝と同様に南方に屈曲する様子が把握できるかどうか調査したものである。結果的に屈曲は認められなかつた。ここでは、テラス部すなわち古い溝の底面の幅が40cmに達していた。

### (5) 本調査Dトレンチ (第11図)

調査区の南東端に設定した。不整形であるが、概ね $10m \times 7m$ 。1号溝が南に屈曲する状態を確認した。しかし確認調査トレンチと同様、1号溝に接して不整形な溝が掘削されており、極めて混沌とした状況になってしまった。土坑の集合体のような部分を5号溝とし、この5号溝と1号溝の間に確認された溝を6号溝とした。なお、当初4号溝とした部分は、1号溝の一部と判断し、欠番とした。



第11図 Dトレンチ平面図

## 2 各造構

### (1) 野馬土手 (第12・13図)

残存していた規模は、長さ53.6m、幅2~2.6m、高さ0.2~0.9mである。土層については、AトレンチとBトレンチで一部を観察した。Aトレンチでは、基盤に当たる土が比較的しまりのよい黒褐色土で、それをしまりの脆弱な表土が覆っていた。Bトレンチでは、基盤に近い土がしまりの弱い黒褐色～暗褐色土で、それをやはり脆弱な表土が覆っていた。

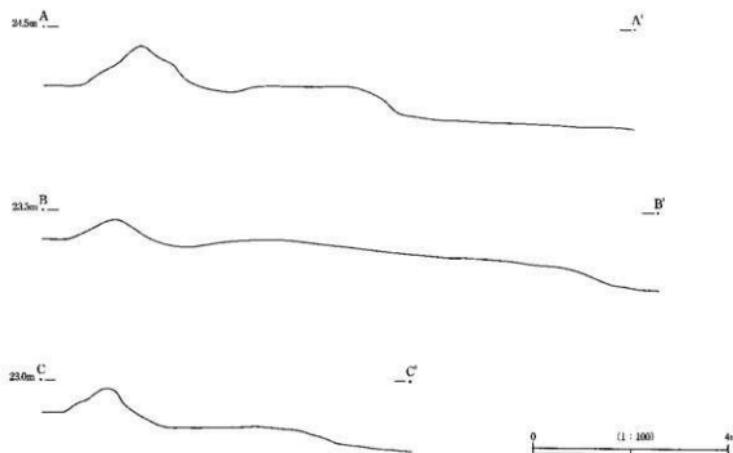
この土手は、掘り込みのしっかりした2号溝の南(牧の内側)にあり、二重土手の内側の土手と考えられる。内側の土手は、道路建設などによって比較的早い段階で破壊されていたようであり、ここにのみ残っていたものである。

### (2) 1号溝 (1M) (第14図)

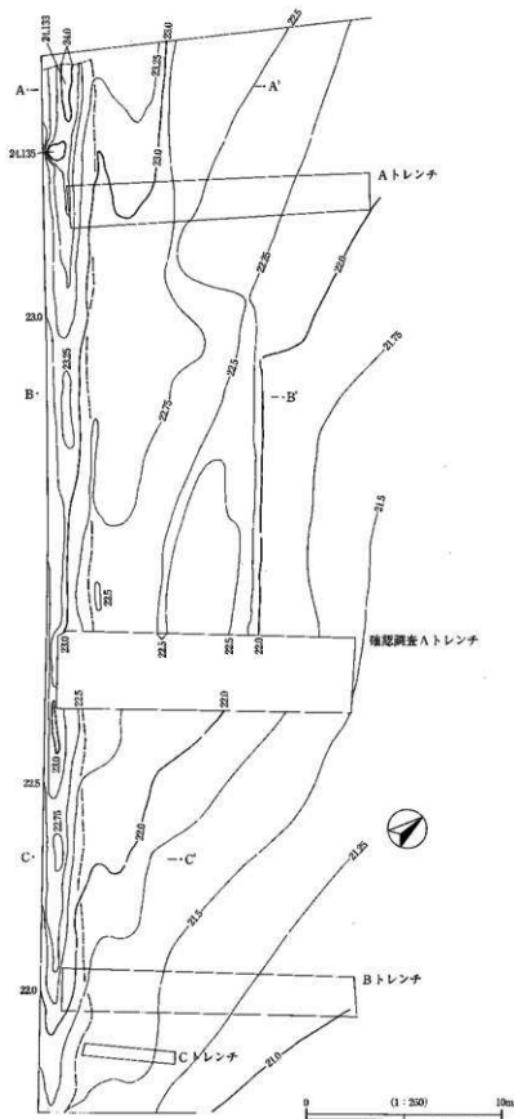
二重土手の北(牧の外側)の溝である。南側の新しい1A溝と、北側の1B溝の2条から成る。1B溝の規模(第14表)は、溝底の幅が平均25cm、深さが60cm前後である。上端は、1A溝の影響で一部を捉え得るのみである。Dトレンチ内では、長方形の土坑がこの溝に伴うようである。

1A溝の規模(第13表)は、溝底の幅が平均25cm、深さが70cm前後である。上端の幅は、擾乱のため捉えにくく、85cm~4mとばらつきが激しい。特にDトレンチでの幅を広く捉えたが、解釈に苦しんだところである。

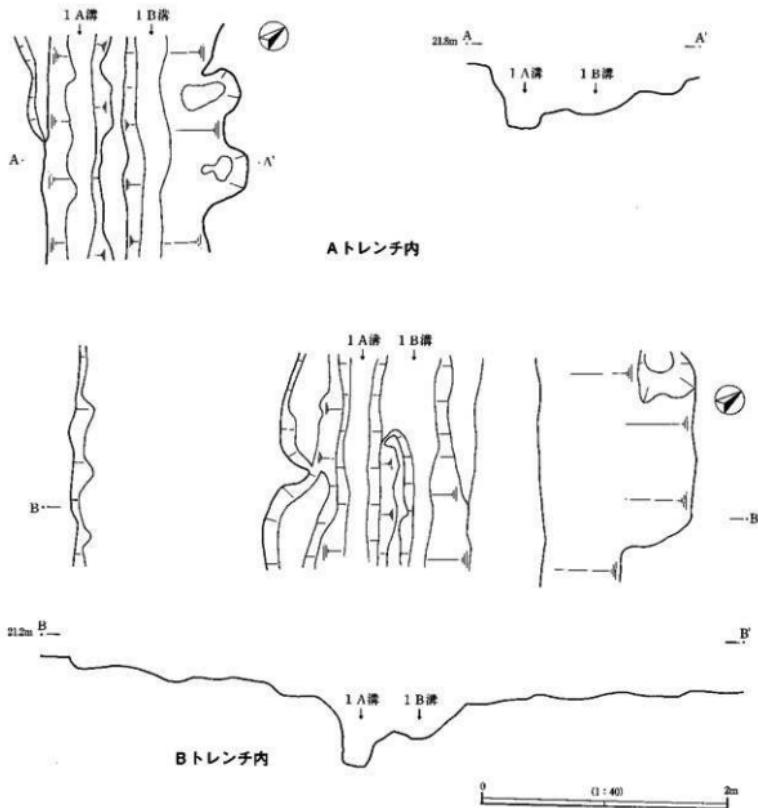
地境として機能したためか、並行して何度も溝が掘られた結果、複雑な形状になってしまったものと考えられる。



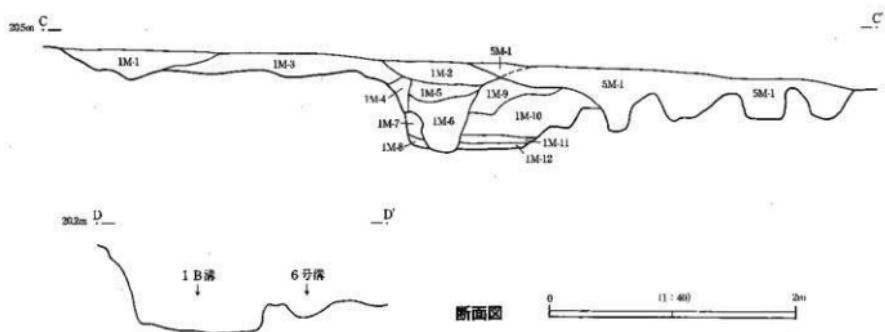
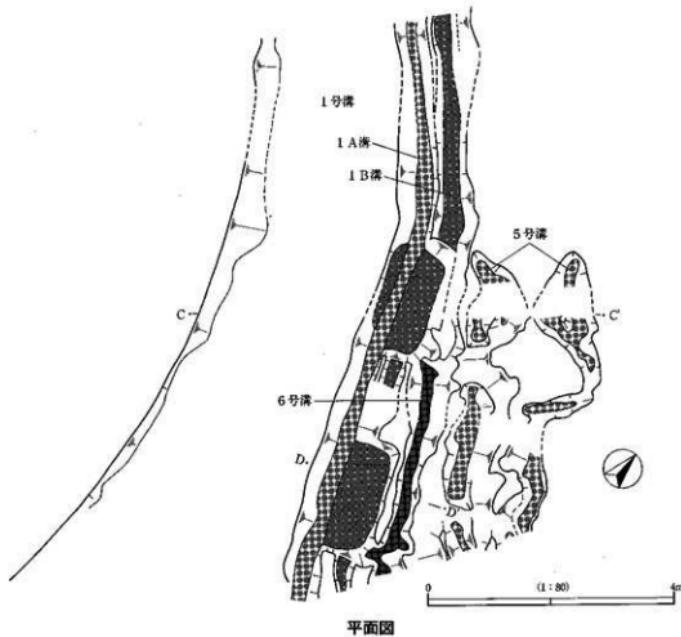
第12図 野馬土手断面図



第13図 野馬土手平面図



第14図 1号溝実測図



第15図 1号溝・5号溝・6号溝実測図 (Dトレンチ内)

第11表 1号溝 (Dトレーンチ) 土層

No	色	腐食	構造	かたさ	細密度	可塑性	植物根	その他
IM-1	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	角粒状～重 角塊状	小	14	弱	細根あり	1AM覆土。ロームをまばらに含む。
IM-2	7.5YR3/3, 4/3 褐色, 喀褐色	富む	角粒状～重 角塊状	小	6~10	中	なし	1AM覆土。範い。
IM-3	7.5YR3/3, 4/3, 4/4 暗褐色, 褐色	富む～含む	角粒状～重 角塊状	小	10~15	弱～中	細根あり	1AM覆土。
IM-4	7.5YR4/3, 4/4 褐色	富む～含む	角粒状～重 角塊状	小	7~10	中～強	細根あり	1AM覆土。ロームを含む。
IM-5	7.5YR3/3 暗褐色	富む	角粒状～重 角塊状	小	7~14	中	なし	1AM覆土。範い。
IM-6	7.5YR3/4 暗褐色	含む	角粒状～重 角塊状	小	13~15	中～強	細根あり	1AM覆土。往1cmロームブロックをまばらに含む。黒色土をブロック状に微量含む。
IM-7	7.5YR4/4 褐色	含む	角粒状～重 角塊状	小	8~13	強	細根あり	1BM覆土。ローム主体。
IM-8	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	角粒状～重 角塊状	0~小	10	強	細根あり	1BM覆土。ロームを少量含む。
IM-9	7.5YR3/3 暗褐色	富む	亜角塊状	小	14~18	弱	細根あり	1BM覆土。移2cm以下黄色粒子をまばらに含む。
IM-10	7.5YR3/3 暗褐色	富む	亜角塊状	小～中	16~20	中	細根あり	1BM覆土。往1cmロームブロックをまばらに含む。
IM-11	7.5YR3/2 黒褐色	頗る富む	亜角塊状	小～中	13	強	なし	1BM覆土。褐色土を微量含む。
IM-12	7.5YR3/3, 4/3 暗褐色, 褐色	富む	角粒状	0	13~15	強	なし	1BM覆土。往1cm以下ロームブロックをまばらに含む。

第12表 5号溝 (Dトレーンチ) 土層

No	色	腐食	構造	かたさ	細密度	可塑性	植物根	その他
5M-1	7.5YR3/3, 4/3, 4/4 暗褐色, 褐色	富む～含む	角粒状～重 角塊状	0~小	15~17	弱～中	細根あり	往2~3cmロームブロックを含む。

第13表 1A溝の規模

単位: cm

トレーンチ名	幅		深さ
	上	溝底	
Aトレーンチ	190	12~24	71
確認トレーンチ	85~90	20~34	56
Bトレーンチ	250~332	15~25	80
Dトレーンチ	362~400	20~30	74

第14表 1B溝の規模

単位: cm

トレーンチ名	幅		深さ
	上	溝底	
Aトレーンチ	62~104	18~26	60
確認トレーンチ	64~87	16~52	68
Bトレーンチ	240	13~64	65
Dトレーンチ	24~72 上坑部	18~36 100	50 71

第15表 5号溝の規模

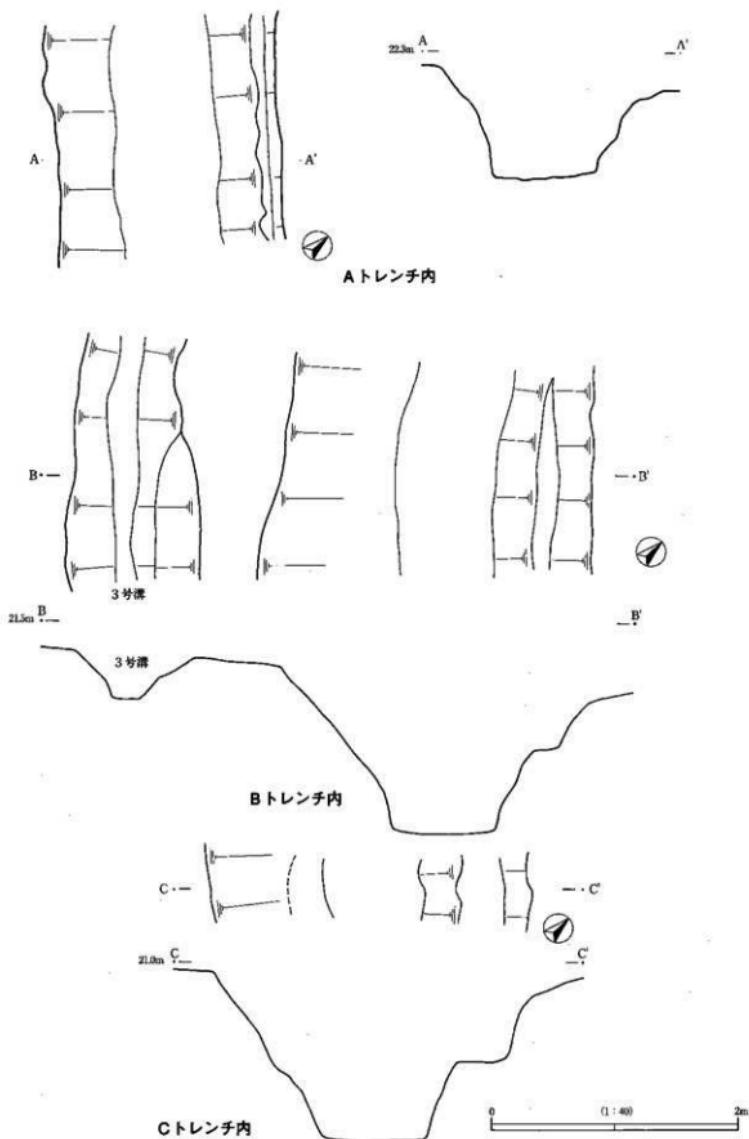
単位: cm

トレーンチ名	幅		深さ
	上	溝底	
Dトレーンチ	140~313	10~30	7~51

第16表 6号溝の規模

単位: cm

トレーンチ名	幅		深さ
	上	溝底	
Dトレーンチ	32~84	12~36	58



第16図 2号溝実測図

(3) 2号溝 (2M) (第16図)

二重土手の間にある溝である。南側の新しい2A溝と、北側の2B溝の2条から成る。2B溝の溝底は、2号溝の北壁のテラスとして残存している所がある。2A溝が2B溝よりも南にずれた位置に、より深く掘られているためである。規模(第18表)は、テラスの幅が0~40cm、深さが60~86cmである。上端は、2A溝の影響で全くわからない。

2A溝の規模(第17表)は、上端が251~290cm、溝底の幅が73~96cm、深さが130~152cmである。短軸断面が逆台形のしっかりとした溝であり、1号溝とは形態差が顕著である。

(4) 3号溝 (3M)

野馬上手に接するように掘られている。規模(第19表)は、上端が20~120cm、溝底の幅が4~29cm、深さが13~60cmである。土手との関係は、捉えにくく解釈に苦慮した。Bトレンチの状況から見て、土手よりも古く、上手構築の際に埋められた溝かもしれない。

(5) 5号溝 (5M) (第15図)

溝というよりも土坑の集合のような状態である。

(6) 6号溝 (6M) (第15図)

1号溝と5号溝の間に、溝底を比較的明確に捉えることができた。

第17表 2A溝の規模

単位: cm

トレンチ名	幅		深さ
	上	溝底	
Aトレンチ	251	77~89	130
確認トレンチ	274	73~96	152
Bトレンチ	290	78~83	144
Cトレンチ	262	72~82	130

第18表 2B溝の規模

単位: cm

トレンチ名	幅		深さ
	上	溝底(テラス部)	
Aトレンチ	—	6~11	61
確認トレンチ	—	6~25	86
Bトレンチ	—	0~18	80
Cトレンチ	—	32~40	59

第19表 3号溝の規模

単位: cm

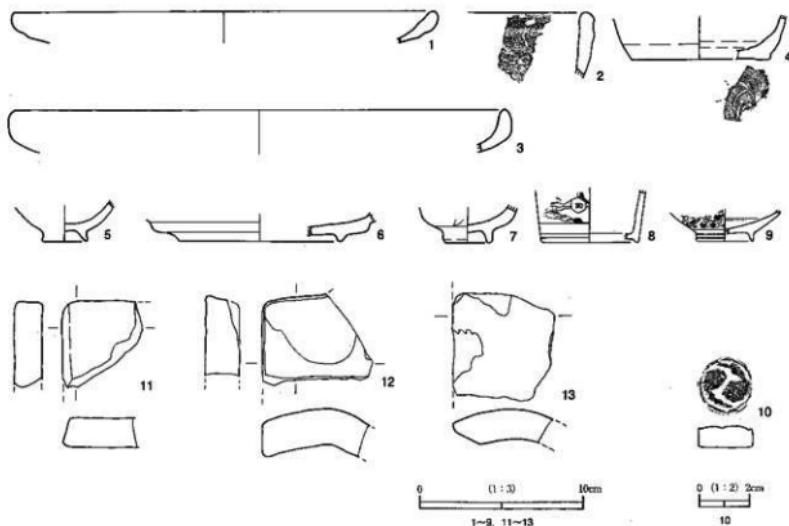
トレンチ名	幅		深さ
	上	溝底	
Aトレンチ	20~120	4~15	13~48
確認トレンチ	60	17~29	60
Bトレンチ	74~110	12~25	42

### 3 遺物

本調査で出土した遺物は、陶磁器127点、瓦172点、焰烙などの素焼土器43点、焼成粘土塊21点、鉄製品・鉄滓27点、砥石2点、小～中疊319点、貝4点、石器・繩文土器・泥面子・文久永宝・ロウ石各1点など合計720点であった。この他、確認調査で出土・採集した遺物を併せて以下に報告する。

#### (1) 1号溝(1M)出土遺物(第17図)

陶磁器61点、瓦54点、素焼土器17点、焼成粘土塊12点、鉄製品・鉄滓7点、小～中疊106点、貝1点など合計258点であった。このうち19世紀の所産と考えられる焰烙、肥前產の陶磁器、瓦片などを図示した。なお貝は、ハマグリの破片であった。



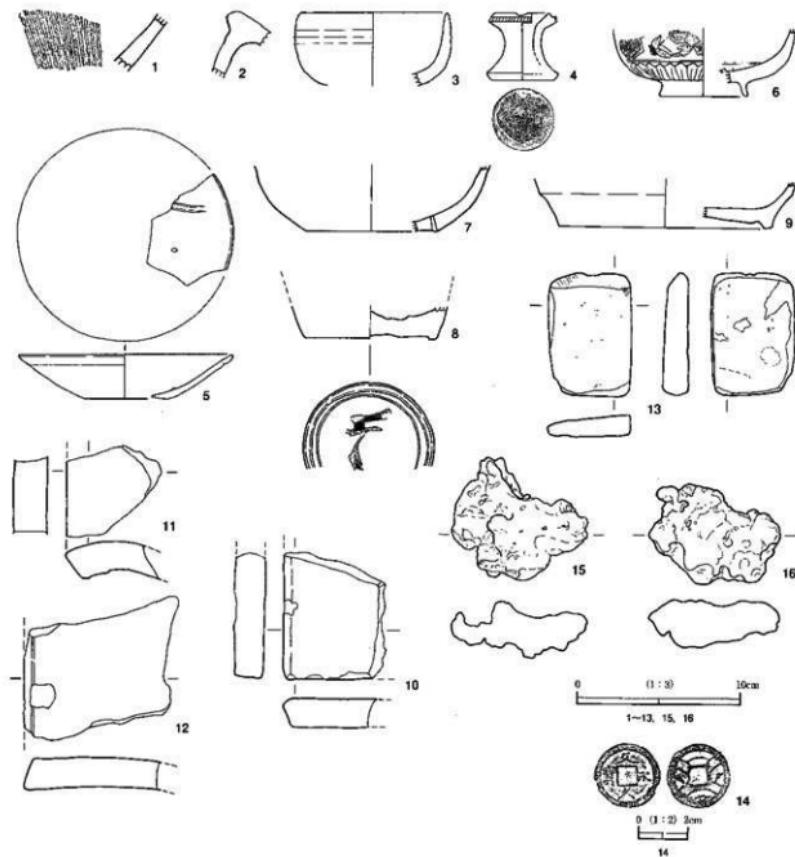
第17図 1号溝出土遺物

第20表 1号溝出土遺物(第17図)

遺物No	種類	部位	計測値(cm)	特徴・測量・文書などの特徴	○出土 ●色調	出土位置
1	焰烙	口縁部	口径(26)	ロクロ底形。19世紀。	○砂質 ●褐色	Aトレ1M
2	鋸か	口縁部		ロクロ底形。内・外) 黒土テクスチャ。95%下平土充填。19世紀。	○鐵質 ●褐色	Aトレ1M
3	焰烙	口付(30)		ロクロ底形。内・外) 烟ナガ底。外) 褐斑。19世紀。	○鐵質 ●外) 黑褐色 内) 淡褐色	Dトレ1M
4	上輪掌上器	全体(背面丸み)	直径(8.2)	ロクロ底形。底外) 削切面。	○表面粗砂 ●淡褐色	Dトレ1M
5	直部小網	体中央一底基	高台(2.8)		○鐵質 ●白色	Bトレ1M
6	網部 瓦	瓦部	底径(13)	肥前窯。	○鐵質 ●白色	Dトレ1M
7	陶器袋口	全体	高台(3)	外) 安付口(縫合)。肥前窯。	○鐵質 ●白色	Dトレ1M
8	陶器そば絞口	全体	底径(6)	外) 安付口(底・縫合)。肥前窯。	○鐵質 ●白色	Dトレ1M
9	焰烙	体中央一底基	高台(3.4)	外) 安付口(底・縫合)。底外側) 安付口(文字「天」)。肥前窯。	○鐵質 ●白色	Dトレ1M
10	繩文子 内輪形	全体	横22-23 厚0.9、6.1g	中型。左二つ目。ミサキ。	○鐵質 ●淡褐色	種Aトレ1M
11	瓦				○鐵質 褐色	Aトレ1M
12	瓦				○長石、粘土一細粒 ●淡褐色	Aトレ1M
13	瓦				○鐵質 ●灰白色	Dトレ1M

(2) 2号溝 (2M) 出土遺物 (第18図)

陶磁器22点、瓦61点、素焼土器9点、焼成粘土塊6点、鉄製品・鉄滓4点、砾石1点、小～中疊58点、貝2点、泥面子1点・文久永宝1点など合計165点であった。このうち18世紀の所産と考えられる堺産の擂鉢、常滑産の甕、瀬戸美濃産の茶碗、19世紀の信楽産の仏具、19世紀中葉以降流通する文久永宝、その他の瓦片、鉄滓などを図示した。なお、貝は、イワガキ (?) 片である。



第18図 2号溝出土遺物

第21表 2号溝出土遺物（第18図）

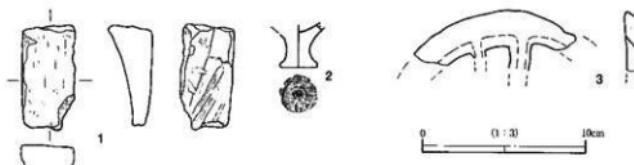
遺物No	器形	部位	計測値(cm)	特徴・調査・文様などの特徴	○粘土 ●色調	出土位置
1	圓筒	器底		外：灰褐色、須貝、滑面。	○白色 ●黒色及び褐色	Aトレ2M
2	瓶	口縁部		内・外：施釉、器蓋、18世紀、常滑產。	○褐色 ●純い赤褐色、黄白色。	Cトレ2M
3	茶碗	口縁下端、約1/4	高さ(4.4)、口径(9)	ロクロ成型。施釉。外：剥け分けた上部灰褐色、下部焦褐色。内：灰褐色。18世紀後半、焼成前後。	○褐色、細砂 ●外：下部灰褐色、下部黑褐色。内：灰白色	Aトレ2M
4	豆明具	脚部	高さ(4.1)、底径(4.3)	ロクロ成型。灰褐色。底外ののみ無釉。乾燥。内：灰褐色。19世紀前半。密窓。	○灰白、細砂 ●灰白色	Bトレ2M
5	豆明具	LJ縁～底部	内:5.27、口径(1.3)、底径(5)	ロクロ成型。内：裏面のようやく行花輪。19世紀。信楽製。	○鐵青 ●灰褐色、灰褐色	Aトレ2M
6	瓶	体中～底部	(11.2)、底径(5.4)	体側最大径(11.2)、底径(5.4)。ロクロ成型。内：斜付け。19世紀。肥厚感。	○鐵青 ●白色、斜付け有	Aトレ2M
7		体下～底部	底径(8)	ロクロ成型。内・外：施釉。底面に径3mmの貫通孔4箇所。江戸市内発見。	○鐵青、粗砂 ●淡褐色	床Aトレ2M
8	瓶	底部	底径(8)	ロクロ成型。底部：肩部の粗砂。	○鐵青 ●黃白色	Bトレ2M
9	壺	裏部	底径(13)	内：灰褐色、外：上部灰褐色。底は黄褐色。	○暗褐色、底白か。●純い赤褐色、黄白色	Bトレ2M
10	瓦			屋上用	○むら夫・長引織、粗砂 ●灰褐色	Bトレ2M
11	瓦			内面	○鐵青 ●灰色	Aトレ2M
12	瓦			屋上用	○鐵青 ●灰色	Aトレ2M
13	砥石		7.5×5.1×1.2～1.6cm 1004g	比較的軟弱、底はあるが、表面に溝がある。以下穴がある。	褐色	Cトレ2M
14	文久永宝	略定形	径2.8、孔径0.7、 15g	銅鏡。裏面に波文。		Bトレ2M
15	鉄斧		8.3×7.9×3.1 104.1g	タール状に黑色に光る部分がある。		Aトレ2M
16	鉄斧		7.9×6.2×2.8 106.9g	灰色、黑色に光る部分がある。		Cトレ2M

(3) 3号溝(3M)出土遺物(第19図)

出土遺物は少なく、陶磁器1点、瓦1点、砥石1点であった。砥石を図示した。

(4) 5号溝(5M)出土遺物(第19図)

陶器35点、瓦29点、素焼上器10点、焼成粘土塊1点、鉄製品・鉄洋16点、小～中礫97点、貝1点など合計189点であった。このうち素焼土器と鉄製品を図示した。鉄製品は、七輪の内部で使用される鉄質の破片と考えられる。なお、貝は、アカガイ(?)片であった。



第19図 3号溝(1)・5号溝(2・3)出土遺物

第22表 3号溝出土遺物(第19図)

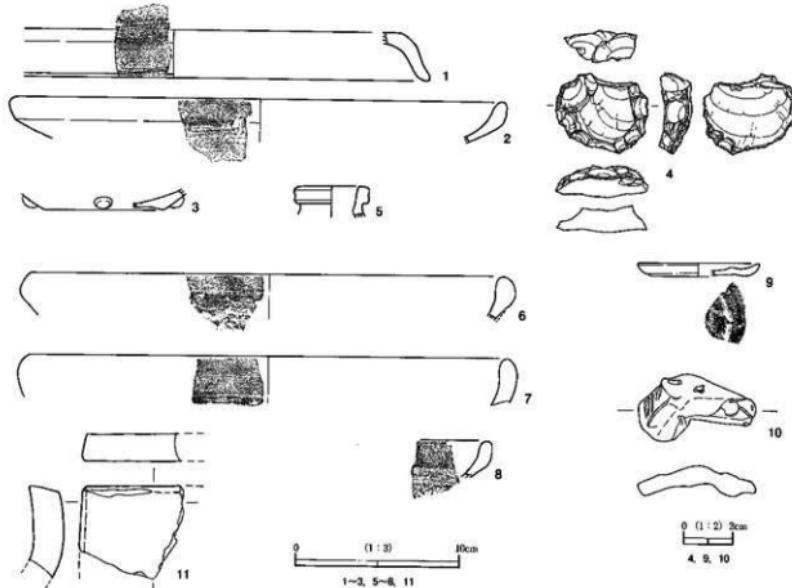
遺物No	器形	部位	計測値(cm)	特徴・調査・文様などの特徴	○粘土 ●色調	出土位置
1	砥石		6.4×1.2×2.7～0.8cm 38g	鉛筆な石。仕上げ用砥石か。	白色系、褐色	Bトレ2M

第23表 5号溝出土遺物(第19図)

遺物No	器形	部位	計測値(cm)	特徴・調査・文様などの特徴	○粘土 ●色調	出土位置
2	瓶身小		底径(2.5)	ロクロ成型。	○鐵青 ●褐色	Dトレ2M
3	裏蓋か		径(15.2)、高さ(1.3～2.2)、厚さ0.05～0.07cm			Dトレ2M

(5) Dトレーナー出土遺物 (第20図)

溝が混沌とした状態であったため、トレーナー括としたが、溝出土の遺物が含まれるものと考えられる。陶磁器8点、瓦25点、素焼土器7点、焼成粘土塊2点、小～中疊56点など合計98点であった。また、確認調査でG-8-1トレーナー出土遺物があるが、これは、Dトレーナーと同じ位置である。19世紀の焙烙や、馬を表した泥面子、石器などを示した。4は、玉類を加工した擦器と考えられる。石材などから見て旧石器の可能性がある。



第20図 Dトレーナー (G-8-1) 出土遺物

第24表 Dトレーナー出土遺物 (第20図)

遺物No	形態	部位	計測値 (cm)	鏡形・調査・文様などの特徴	○地土 ●色調	出土位置
1	火鉢の蓋	口縁部	L10.0 (30以上)	ロクロ成形。	○地赤 ●白色	Dトレ
2	焙烙	口縁部	W15.0 (30)	ロクロ成形。19世紀。	○地赤 ●白色	
3	土瓶	底部	高さ7.2	ロクロ成形か。無地。外）瘤文。	○地砂多 ●灰褐色	Dトレ
4	擦器		35×3.3×1.3 17.6g	輪廓の剥片を素材とする。打撲の発達が弱いことから、若村剥片の発達度は、ソフトウェアで用いている初期段階である。周囲に15mm程度の幅の剥片が残っている。表面からは細かい網状の状況さえ見える。光澤に風化表面の新しい微細な剥片が多数認められるが、既往の既産業であろう。	石材 玉類 (原石)。●特有褐色	Dトレ
5	櫛利	口縁部	口径 (4.5)	ロクロ成形。内・外) 扇形。19世紀。表面無處理。	○軟土 長石斑晶 ●灰白色	G-8-1
6	焼器	口縁部	口径 (29.8)	ロクロ成形。横ナギ紋。19世紀。	○細砂 ●灰色、砂褐色	G-8-1
7	粘土器	口縁部	口径 (29.2)	ロクロ成形。横ナギ紋。19世紀。	○細砂 ●灰色、砂褐色	G-8-1
8	焙烙	口縁部		ロクロ成形。横ナギ紋。19世紀。	○細砂 ●白色、砂褐色	G-8-1
9	皿	LJ縫～底部	高さ0.55 LJ縫 (5) 底径 (3.8)	ロクロ成形。	○細砂 ●灰褐色	G-8-1
10	瓦 瓦面子 型模子	手欠か	18×2.0 厚0.9 <7.5g>	瓦。表面は痘状。	○細砂 ●白色	G-8-1
11	瓦				○粗砂、石灰岩混少 ●淡青色	G-8-1

(6) その他のトレンチ出土遺物（第21図）

擂鉢、泥面子、煙管の雁首を図示した。

(7) 採集遺物（第22図～26図）。

確認調査の際に採集した遺物を報告する。調査対象地の畑は、前述したように市内有数の泥面子散布地点であるため、主体は泥面子である。

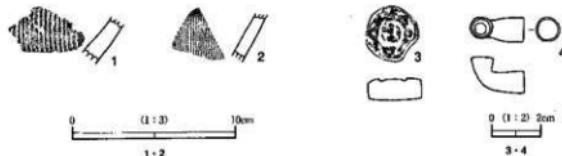
繩文土器は、わずかな出土であった。隣のf地点で撫糸文期の住居跡などが検出されているので、該期の遺物の存在を予想したが、全く見出せなかつた。第22図1は、前期関山式と考えられる。高津新田遺跡c地点の調査で関山式土器が少量であるが出土しており、関連するものであろう。同図2は、頭部に横走沈線が3条（1条は、破片の端部のため見難い）巡るもの。後期堀之内式期のものか。

第22図4は、土師質の上器片で、布痕がある。東京都白鷗遺跡で出土した焼塙壺蓋の内面に布痕があり（都立学校遺跡調査会1990）、類似品かもしれない。

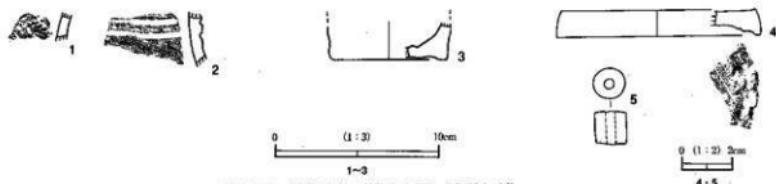
円盤形泥面子は、大型と称されるものは1点のみで、ほとんどは中型であった。やや摩滅しており、文様がよく読み取れなかつた。型抜きのものは、欠損品がほとんどであった（第23図）。碁石形が多く、断面レンズ状の端整な作りのもの（第24図1～4）と、やや扁平で歪んだもの（同図5～19）とがある。後者には指紋の残るものが多く、作り方に違いがあるようである。また、端整なものには白色を帯びるものが多い。彩色の痕跡は認められない。

一方、白色の貝製碁石と黒色の石製碁石も採集された（第25図）。

この他、「虎」字のスタンプ、ガラス製おはじきなどを図示した（第26図）。



第21図 その他のトレンチ出土遺物



第22図 採集遺物（縄文土器・徳利など）

第25表 その他のトレンチ出土遺物（第21図）

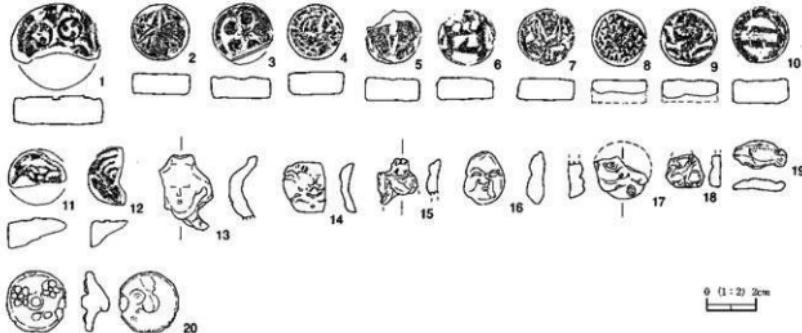
遺物No	器形	部位	計測値 (cm)	箇所・調査・文様などの特徴	○地土 ●にぶい赤褐色	出土位置
1	擂鉢	腹部		内・外・底面、裏面尖透窓。	○地河 ●にぶい赤褐色	F-44
2	擂鉢	頭上部		内・外・底面、裏面（形態）。明治以前、甚子底。	○地窓 ●にぶい赤褐色	D-74
3	泥面子 円盤形		H2.15～2.3 厚0.9～4.6mm	中型。丸二つ巴など。	○赤褐色粒子、細砂 ●淡褐色	F-71
4	煙管	頭部	22×10×6.9	割れ品。		F-44

第26表 繩文土器（第22図）

遺物No	基形	部位	計測値 (cm)	形態・調整・文様などの特徴	○胎土 ●色調	出土位置
1	小片			外) 製文か。内) ナテ。筒山式か。	○褐色混入 ●灰色、解れ白灰色。	D-4
2	深井	底部	深さ14	外) 伏せ花瓶2条。ミガキ。内) ナテ。	○褐色 ●褐色	玄界

第27表 採集遺物—陶器・素焼土器—（第22図）

遺物No	基形	部位	計測値 (cm)	形態・調整・文様などの特徴	○胎土 ●色調	出土位置
3	直柄	底部	直径7.2	17世紀後半。施墨は一部。	○褐色 ●外) 深色、淡褐色。 内) 黄色。	玄界探査
4	署か	縁部	径8	ロクロ形成か。十脚質。内) 帽面。	○赤褐色、朱褐色粒子、褐色 ●淡褐色	玄界探査
5	曾玉形 上製品	完形	高1.3×底21.35、厚0.4、24g	茎み少なく、垂直性のある作り。	○赤褐色粒子、褐色 ●淡褐色、白色	玄界探査



第23図 採集遺物（泥面子）

第28表 採集遺物—泥面子・円盤形—（第23図）

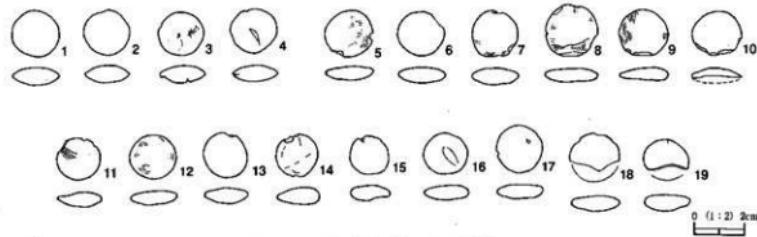
遺物No	基形	部位	計測値 (cm)	形態・調整・文様などの特徴	○胎土 ●色調	出土位置
1	丸面子	1/3欠損	径3.6厚1.15 <1.2g>	大型。右三つ巴。	○赤褐色粒子、褐色 ●灰色	玄界探査
2	丸面子	略定形	径2.5~2.35 厚0.8~0.53g	中型。植物か。	○赤褐色粒子、褐色 ●淡褐色	玄界探査
3	丸面子	一部欠損	径2.1 <1.2g>	小形。植物。	○赤褐色粒子、褐色 ●淡褐色、白色	玄界探査
4	丸面子	略定形	径0.9 厚0.8 5.2g	中型。右三つ巴か。	○赤褐色粒子、褐色 ●淡褐色	玄界探査
5	丸面子	一部欠損	径2.2~2.3 厚0.8~<1.1g>	中型。文様不明。	○褐色 ●淡褐色	玄界探査
6	丸面子	一部欠損	径2.2~2.3 厚0.8~<1.1g>	中型。彩色か。文様不明。	○赤褐色粒子、褐色 ●褐色	玄界探査
7	丸面子	略定形	径2.25 厚0.9 5.7g	中型。彩色か。植物か。	○赤褐色粒子、褐色 ●褐色	玄界探査
8	丸面子	半欠	径2.25~0.55 <1.2g>	中型。植物か。	○褐色 ●褐色	玄界探査
9	丸面子	半欠	径2.25~2.23 厚0.7~<1.9g>	中型。植物か。	○褐色 ●淡褐色	玄界探査
10	丸面子	略定形	径2.25~2.3 厚0.9~6.1g	中型。丸に二つ引。	○褐色 ●淡褐色	玄界探査
11	丸面子	欠損	径2.35上 厚<1.1>~<2.1g>	中型。植物か。	○褐色 ●淡褐色	玄界探査
12	丸面子	欠損	径2.35 厚<1.05>~<2.3g>	中型。淡色。	○赤褐色粒子、褐色 ●淡褐色	玄界探査

第29表 採集遺物-泥面子 型抜き一（第23図）

遺物No	器形	部位	計測値 (cm)	量形・測器・文様などの特徴	○粘土 ●色調 ○網目 ●模様色	出土位置
13	泥面子	欠損	31×2×0.5, <3.7g>	女性。長山理子。	○網目 ●淡褐色	表面採集
14	泥面子	欠損	2.05×1.7×0.45, <1.4g>	丸か。裏面ぼか。	○網目 ●淡褐色	表面採集
15	泥面子	欠損	2.45×1.7×0.45, <0.9g>	横顔を吹く人。牛若丸か。裏面ぼか。	○網目 ●淡褐色	表面採集
16	泥面子	略芯部	2.15×1.5×0.55, <1.9g>	おかめ。裏面平滑。	○網目 ●淡褐色	表面採集
17	泥面子	半欠	2.3×1.5×0.55, <1.9g>	ひょっこ。裏面平滑。	○網目 ●淡褐色	表面採集
18	泥面子	頭部欠損	1.5×1.3×0.4, <0.9g>	顎子を持つ人。裏面平滑。	○網目 ●淡褐色	表面採集
19	泥面子	完形	2.15×1.1×0.45, 0.8g	丸。裏面平滑。	○網目 ●淡褐色, 褐色	表面採集

第30表 採集遺物-泥面子 立体一（第23図）

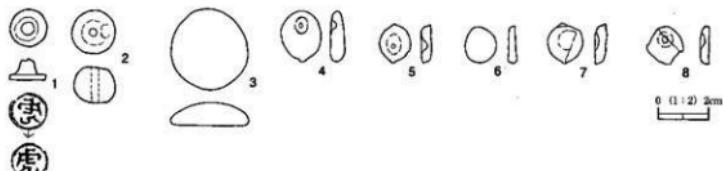
遺物No	器形	部位	計測値 (cm)	量形・測器・文様などの特徴	○粘土 ●色調 ○網目 ●模様色	出土位置
20	泥面子	略芯部	2.3~2.5×1.1 3.2g	スタンプ形。星形模様の面に施加。	○網目 ●淡褐色, 深褐色, つまみ押捺色	表面採集



第24図 採集遺物（基石形土製品）



第25図 採集遺物（貝製基石・基石）



第26図 採集遺物（銅製品・ガラス製品）

第31表 採集遺物－墓石形土製品一（第24図）

遺物No	器形	部位	計測値 (cm)	形状・調整・文様などの特徴	○歯土 ●色調	出土位置
1	圓筒子	完形	径1.9 厚0.75 2.2g	均整。	○繊維 ●淡褐色(白色味)	表面採集
2	圓筒子	完形	径1.85 厚0.7, 1.8g	均整。	○繊維 ●褐色	表面採集
3	圓筒子	完形	径1.85×1.75 厚0.7, 1.5g	均整。突け目あり。	○繊維 ●淡褐色(白色味)	表面採集
4	圓筒子	完形	径1.8×1.9 厚0.6, 1.4g	均整。突け目あり。	○繊維 ●淡褐色(白色味)	表面採集
5	圓筒子	完形	径1.85×1.9 厚0.6, 1.2g	重む。指紋あり。	○繊維 ●褐色	表面採集
6	圓筒子	略完形	径1.8×1.85 厚0.6, 1.7g	重む。	○繊維 ●淡褐色	表面採集
7	圓筒子	略完形	径1.8×1.9 厚0.7, 1.9g	重む。指紋あり。	○繊維 ●褐色	表面採集
8	圓筒子	略完形	径1.8 厚0.5, 2.1g	重む。端平。指紋あり。	○繊維 ●褐色	表面採集
9	圓筒子	略完形	径1.8×1.85 厚0.6, 1.7g	指紋あり。	○繊維 ●褐色	表面採集
10	圓筒子	半欠	径1.95 厚0.6, <1.1g>	若干歪む。指紋あり。	○繊維 ●淡褐色	表面採集
11	圓筒子	完形	径1.8×1.7 厚0.6, 1.8g	重む。指紋あり。	○繊維 ●褐色	表面採集
12	圓筒子	完形	径1.8×1.9 厚0.6, 1.5g	重む。指紋あり。	○繊維 ●淡褐色	表面採集
13	圓筒子	略完形	径1.8×1.8 厚0.6, 1.5g	重む。	○繊維 ●褐色	表面採集
14	圓筒子	略完形	径1.7×1.65 厚0.7, 1.6g	重む。	○繊維 ●褐色	表面採集
15	圓筒子	略完形	径1.55 厚0.6, 1.4g	重む。指紋あり。	○繊維 ●褐色	表面採集
16	圓筒子	電形	径1.75×1.7 厚0.6, 1.6g	重む。端平。	○繊維 ●褐色	表面採集
17	圓筒子	略完形	径1.8×1.9 厚0.6, 1.7g	重む。	○繊維 ●褐色	表面採集
18	圓筒子	欠損	径2.0 厚0.6, <1.6g>	重む。	○繊維 ●褐色	表面採集
19	圓筒子	欠損	径2.05 厚0.65, <1.4g>	重む。	○繊維 ●淡褐色	表面採集

第32表 採集遺物－貝製墓石・墓石一（第25図）

遺物No	器形	部位	計測値 (cm)	形状・調整・文様などの特徴	○歯土 ●色調	出土位置
1	各石形		径2.4×2.2 厚0.35, 1.8g	重む。	貝製品 ●白色	表面採集
2	墓石形		径1.45 厚0.25, 0.3g	断面レンズ状。	貝製品 ●白色	表面採集
3	墓石形		径1.45×1.4 厚0.3, 0.4g	断面レンズ状。	貝製品 ●白色	表面採集
4	薪石	半欠か	径2.15 厚0.35, 2.5g	重む。	石製品(軽板岩か) ●黒色	表面採集
5	薪石	完形	径2.15 厚0.25, 2.1g	断面扁平。	石製品(軽板岩か) ●黒色	表面採集
6	墓石	完形	径2.05 厚0.55, 3.6g	断面レンズ状。	石製品(輕板岩か) ●黑色	表面採集

第33表 採集遺物－銅製品・ガラス製品一（第26図）

遺物No	器形	部位	計測値 (cm)	形状・調整・文様などの特徴	○歯土 ●色調	出土位置
1	スタンプ	完形か	径1.7 厚0.65, <1.4g>	「走」の字のスタンプ。	銀製品	表面採集
2	丸玉	完形	径1.75 厚1.5, 8.0g	貫通孔あり。	ガラス製品 ●白色、くすんだ白色	表面採集
3	おはじき	完形	径3.3×3.35 厚0.95, 15.2g	無文。気泡あり。	ガラス製品 ●破黄色。	表面採集
4	おはじき	完形	径2.05×1.6 厚0.6, 3.2g	無文あり。気泡あり。	ガラス製品 ●水色。	表面採集
5	おはじき	電形	径1.6×1.25 厚0.4, 1.2g	傷みあり。気泡あり。	ガラス製品 ●水色。	表面採集
6	おはじき	完形	径1.6×1.25 厚0.35, 0.9g	傷み無し。気泡あり。	ガラス製品 ●水色。	表面採集
7	おはじき	完形	径1.6×1.4 厚0.45, 1.6g	傷みあり。気泡あり。	ガラス製品 ●青色。	表面採集
8	おはじき	完形	径1.3×1.5 厚0.25, 1.1g	傷みあり。気泡あり。	ガラス製品 ●青色。	表面採集

### III 成果と課題

#### 1 野馬土手

今回調査の h 地点にあった土手は、二重土手の内側に当たる土手であった。外側の土手については、明確な痕跡等を見出すことはできなかった。

二重土手について書かれた記録を探してみると、「明治前期測量 2万分1 フランス式彩色地図」の「671千葉県下総国千葉郡大和田村」（覆刻版：財团法人日本地図センター1997年）の地図の欄外にあるスケッチに、「高津新田馬防土手」があり、大小二つの土手とその間が堀になっている様子がわかる。二重土手は、昭和60年代までは b 地点と e 地点の間に残っていたらしく、昭和60（1985）年5～6月の b 地点調査時の記録に、土手の高さについて「北側が2.4m、南側が1.68m」などと記録され（近江屋1999），房総の牧研究会による記録（第28回 郡1988），八千代市郷土歴史研究会による実測記録（第27回 原・藤原1987）などがある。これらからわかることは、内側の土手が低く、外側の土手が高く規模が大きいということである。

外側の上手の発掘調査例で既に報告されているのは、e 地点のみである。内側の土手の調査例も今回の h 地点が唯一であり、土層調査が不充分であったことは極めて残念なことである。

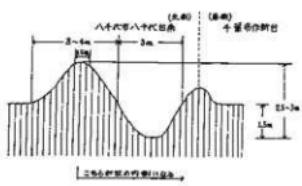
#### 2 野馬堀

野馬堀は、外側と内側にそれぞれ確認した。ともに2条の溝が切り合っており、掘り直しのような行為があったことがわかる。外側のものを1号溝とした。1号溝は、後世の溝なども絡んでおり、形状がわかりづらかったが、外側の溝（1B溝）を内側の溝（1A溝）が切っていると判断した。2号溝は、二重土手の間にあったもので、かつては「ドウカン堀」と呼ばれていたそうである（郡1988）。千葉市では、本遺跡を「遺跡No5 道灌堀（どうかんぼり）」、種別 馬土手、時代等 近世、牧と登録している（千葉市教委1993）。短軸断面逆台形のしっかりした掘り込みであった。こちらも外側の溝（2B溝）が占く、内側に新たにより深い溝（2A溝）を掘ったと考えられる。古い方の溝の底面がテラス状に検出される部分があった。

他地点の堀との関係を見ると（第29図）、今回調査の1号溝は、e 地点では確認されず、b 地点では「北側溝」が相当するのであろう。しかしここでは切り合い関係は認められず、一部に2条の溝底を検出したのみであった。b 地点の西端では検出されず、ここでも途切れていたらしい。g 地点でも検出されなかつた。d 地点では、「2号堀・3号堀」が相当すると考えられ、「2号堀」が1A溝に、「3号堀」が1B溝に当たる。

このように1号溝は、所々で途切れてしまうものであったと見てよさそうである。2号溝に比べて掘り込みの範囲が不明確で、形状が不安定であり、規模は、概ね上端幅が0.8～4.7m、深さは0.4～0.9mで、ばらつきがあった。土手との関係については、e 地点で検出できなかつたため厳密にはわかっていない。幅が狭く浅い部分や、掘り込みのなだらかな部分が認められ、野馬の行き来を遮断する目的で掘られたとは考えがたい部分がある。土手を築造するための上の供給源であったのかもしれないし、あるいは、開拓のために牧の外側から土手の麓を削り取った痕跡かもしれない。

今回の2号溝は、e 地点で土手の南側に検出された「堀」に当たり、さらに b 地点の「南側溝」、g 地点の「野馬堀」、d 地点の「1号堀」に当たる。この溝も b 地点の西端で途切れていることが確認されている。2号溝は、b 地点の途切れ以外では安定している。g 地点では、2条の溝の切り合いが明瞭で、北側の「堀02」を南側の「堀01」が切っている。この切り合い関係が今回の2号溝の2A溝と2B



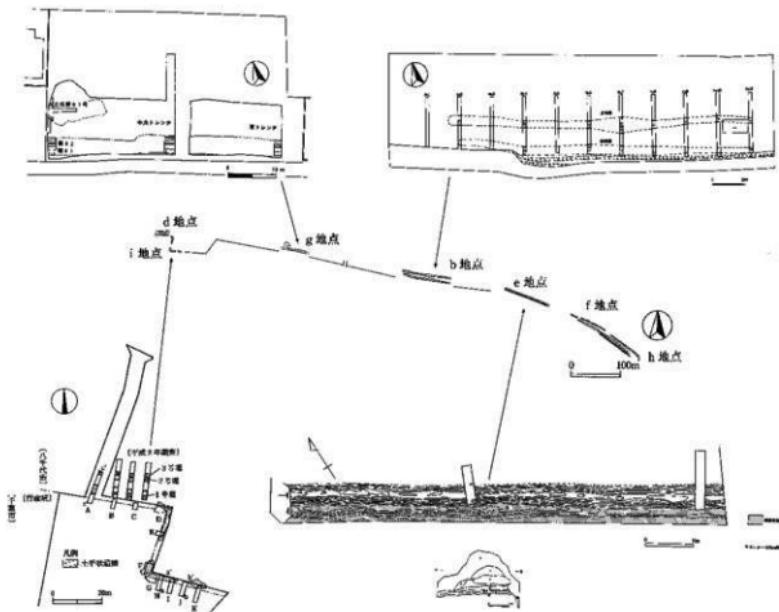
第27図 八千代台南2丁目の野馬土手断面図

(原・藤原1987年から転載)



第28図 野馬土手位置図 a・bが二重土手

(郡1988年から転載)



第29図 主な調査地点

溝の関係を考えるうえで参考となった。

2 A溝の上端幅は2.5~3.8m、深さは1.3~2.4m、2B溝の深さは0.59~1.28mであった。この溝と高さ2m程の外側の土手によって、野馬の行き来は充分遮断できたものと推察する。

野馬堀はb地点の西端で途切れしており、ここに牧への出入口である「木戸」があった可能性があるが、地元の方の話として土手は連なっていたとのことが、報告書に記載されている（近江屋1999）。天明7（1787）年～寛政5（1793）年頃に作成されたと考えられる「小金牧大絵図（寛政図）」には、高津新田にも「木戸」が3箇所示されており、その一つは第29図に示した位置とされ（森山・畠山2002）。b地点の途切れが木戸と関わるかどうかは不明である。

野馬土手の麓にあった3号溝については、土手との新旧関係を明確につかむことができなかつた。5号溝・6号溝は、牧の外側に位置するが、1号溝に沿って掘られたものらしく、1号溝や外側の野馬土手の存在が明瞭であった時期に掘られたものであろう。

野馬堀から出土した遺物は、陶器、磁器、素焼土器、瓦、焼成粘土塊、鉄滓、中～小礫などであった。1号溝からは19世紀代以降の遺物、2号溝からは18世紀～19世紀代などの遺物が出土した。素直に解釈すれば2号溝の方が古くから存在したということになる。

### 3 高津新田野馬堀遺跡の位置

本遺跡は、下野牧の南東端に位置する（第3図）。明治15年の迅速測図によれば、野馬土手は、本遺跡の東端で南北方向にはほぼ直角に曲がり、さらに二股に分かれていく（第2図）。屈曲部の南には沼（あるいは湿地）があり、馬の水飲み場と伝えられ、泉上池と呼ばれていたそうである。現在その名残は、千葉市作新台の大堀公園の一部に残る斜面である。同様に馬の水飲み場と伝えられる地点として、千葉市長作の滝ノ清水跡がある。ここには野馬土手・堀が明瞭に残っており、千葉市教育委員会の説明板が設置されている。

### 4 高津新田遺跡

遺物としては、旧石器の可能性のある搔器1点、わずかな縄文土器と、近世の土器・陶磁器類、泥面子・玩具類を確認した。市内有数の泥面子散布地帯の資料の一部を掲載することができた。

また、埋没谷の存在を確認した。江戸時代以前には深い谷が刻まれ、現状とはかなり異なった景観であったことが推測できる。

### 5 おわりに

現在、高津新田野馬堀遺跡の野馬土手は完全に消滅し、野馬堀は一部が埋没して残存する可能性があるのみとなっている。かつてあった牧の存在を伝える遺跡として、重要性を指摘されてきたにも関わらず、残念な結果となってしまった。そのような意味からも本報告は、貴重な記録ということになるが、調査において幾つか明らかにし得なかったことがあり、調査に携わった者として忸怩たる思いを免れない。今後は、遺物の詳細な分析や、他地域の野馬土手・野馬堀との比較・検討が必要であろう。下野牧・小金牧の実像に迫るために、本報告が一助となることを願うものである。

## 参考文献

- 千葉県教育委員会（1970）千葉県中近世遺跡分布地図（2）：千葉県中近世遺跡目録
- 鎌木行廣（1979）牧場と農民、八千代市史編さん委員会：八千代市の歴史
- 八千代市教育委員会（1983）八千代の遺跡－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－
- 藤下昌信（1986）牧、千葉県教育委員会：千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書
- 村田一男（1987）下総国小金牧について、史談八千代、12、特集・野馬除土手
- 原令子・蘿原忠美子（1987）八千代市の野馬除土手、史談八千代、12、特集・野馬除土手
- 郡武平（1988）野馬除土手調査報告－八千代市高津新田－、河野達二編：房総の牧、4
- 都立学校遺跡調査会（1990）白鶴1
- 八千代市教育委員会（1991）千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成2年度
- 八千代市教育委員会（1993）千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成4年度
- 千葉市教育委員会文化課（1993）千葉市遺跡地図
- 須出茂・鎌木行廣（1994）小金牧・鹿狩・御鷹場に関する史料、八千代市史編さん委員会：八千代市の歴史資料編  
近世Ⅱ
- 財団法人千葉県文化財センター（1997）千葉県埋蔵文化財分布地図(I)－東葛飾・印旛地区（改訂版）－
- 近江屋成陽（1999）千葉県八千代市高津新田野馬堀－埋蔵文化財発掘調査報告書－八千代市遺跡調査会 藤和不動産株式会社
- 八千代市教育委員会（2000）千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度
- 八千代市立郷土博物館（2000）企画展図録 小金牧と狩り
- 財団法人千葉市文化財調査協会（2001）埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書
- 八千代市教育委員会（2002 a）千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度
- 八千代市教育委員会（2002 b）千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書 1
- 八千代市郷土歴史研究会（2002）史談八千代、27、特集 旧村紹介その2 高津新田（現八千代台）の総合研究1
- 森山一徳・高山隆（2002）野馬除土手跡を探る、史談八千代、27
- 牧野光男・板谷繁（2002）地図に見る高津新田の変遷、史談八千代、27
- 大野康男ほか（2006）県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡、千葉県教育委員会

## 報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよしたかつしんでんのまほりいせきえっちちてん						
書名	千葉県八千代市高津新田野馬塚遺跡h地点						
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	常松成人						
編集機関	八千代市遺跡調査会						
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 ☎ 047(483)1151代表						
発行年月日	2007年6月20日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 通路番号	北緯	東經	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
たかつしん でんのまほ り 高津新田 野馬塚遺跡 h地点	やちよしやちよだい みなみ 八千代市八千代台南2 丁目1-2・4-1	12221 251	35度 41分 21秒	140度 5分 47秒	20000417～ 20000508	158/750	宅地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
高津新田 野馬塚遺跡 h地点	牧	江戸時代 近現代	野馬塚、野馬土手	陶器、磁器、素焼き器、瓦、 泥面子、焼成粘土塊、文久 永宝、鉢製品、铁滓、おは じき、砥石、碁石、ロウ石、 櫛、貝 搔器、楳文土器			

# 写 真 図 版

図版 1



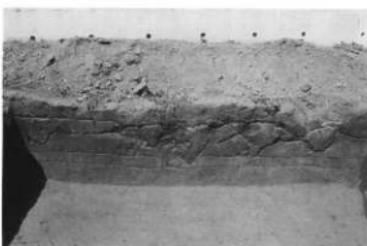
(1) 遺跡遠景 北から



(2) 確認調査D-4-1トレンチ



(3) 確認調査D-5-1土層



(4) 確認調査E-2-1土層



(5) 野馬土手 南から



(6) 野馬土手 西端



(7) 野馬土手 中央付近



(8) 野馬土手 東端

## 図版2



(1) 確認調査トレンチ



(2) Bトレンチ 全景



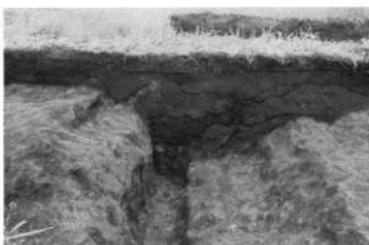
(3) Dトレンチ 全景



(4) 1号溝 —確認調査トレンチ—



(5) 1号溝 —Aトレンチ—



(6) 1号溝 —Bトレンチ—



(7) 1号溝 —Dトレンチ—



(8) 2号溝 —確認調査トレンチ—

図版3



(1) 2号溝 —Aトレンチ—



(2) 2号溝 —Bトレンチ—



(3) 2号溝・3号溝 —Bトレンチ—



(4) 2号溝 —Cトレンチ—



(5) 3号溝土層 —Bトレンチ—



(6) 3号溝 —Bトレンチ—

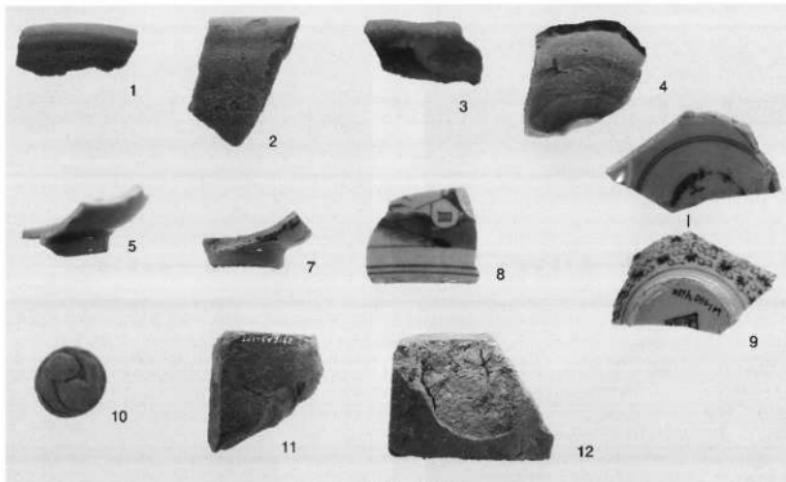


(7) 5号溝 —Dトレンチ—

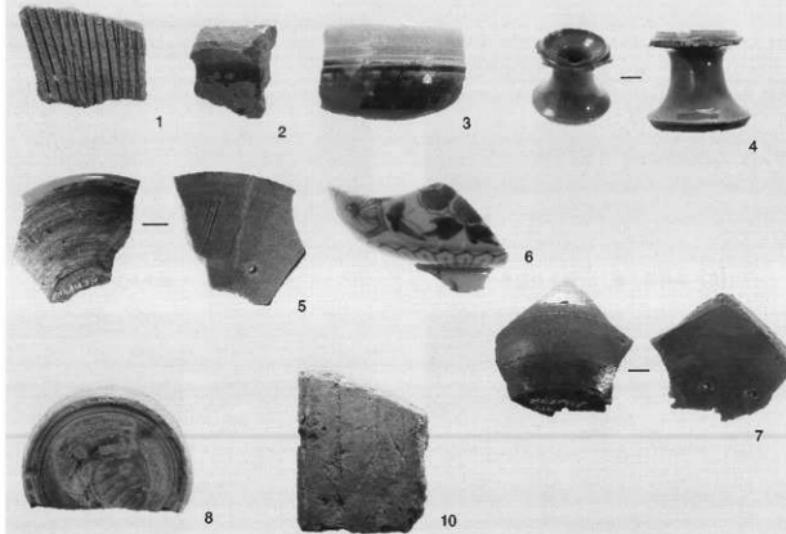


(8) 1号溝・6号溝 —Dトレンチ—

図版4

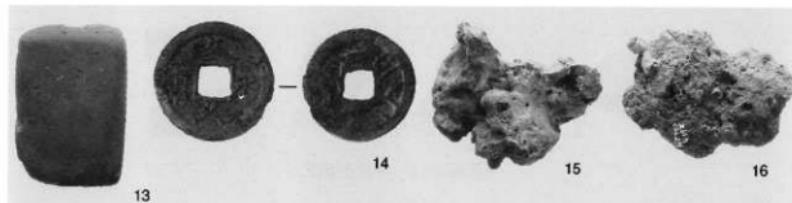


1号溝出土遺物



2号溝出土遺物（1）

図版5



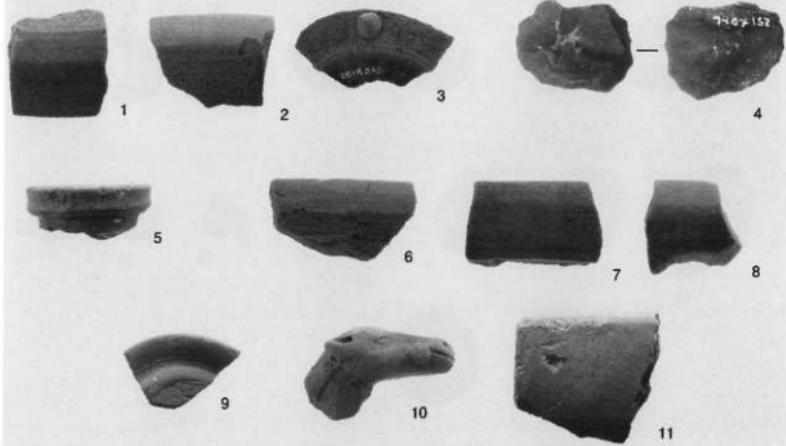
2号溝出土遺物（2）



3号溝出土遺物

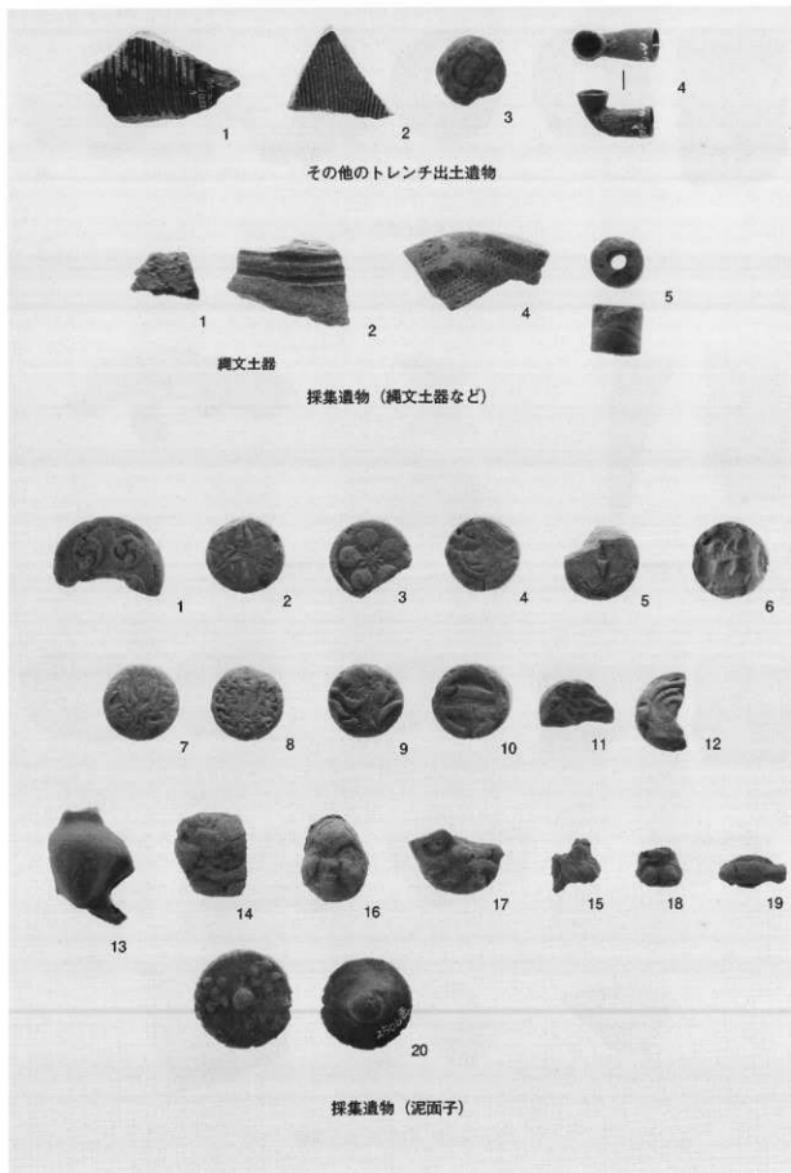


5号溝出土遺物

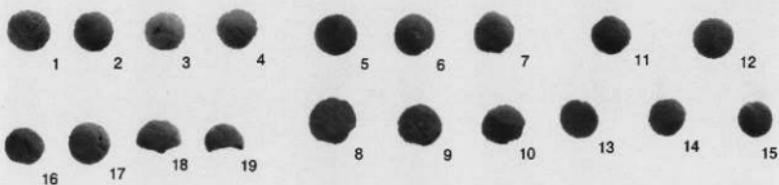


Dトレンチ（G-8-1）出土遺物

## 図版6



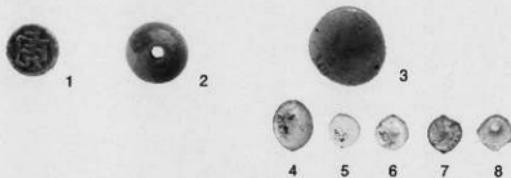
図版7



採集遺物（基石形土製品）



採集遺物（貝製基石・基石）



採集遺物（銅製品・ガラス製品）



焼成粘土塊



瓦



小～中塊

その他の出土遺物

千葉県八千代市  
**高津新田野馬堀遺跡 h 地点**  
— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

---

2007年6月20日 発行

編 集 八千代市遺跡調査会  
〒276-0045 八千代市大和田138-2  
☎ 047-483-1151

発 行 大和ハウス工業株式会社

印 刷 株式会社 宣美

---